3．高校3年

「My　Life――未来を語る」カリキュラム作成への生徒参加とスピーチの発展としてのパネルディスカッションの試み

槙　本　直　子※

【抄録】　これまで2年間の総合人間科では、個人研究、グループ研究の形で、生徒一人一人が研究発表、研究論文、テーマ授業、ディベートと多彩な学習方法を経験してきた。この過程で生徒の自主的な授業参加や授業の創造が見られ、評価能力の高まりも感じられた。高校3年では、その成果を生徒が総合人間科の授業計画の作成に直接関わることで活かすことを試みた。また、最終学年として総合人間科の目的である「自分の人生を自覚的に選択する力」をパネルディスカッションの形で表現した。

【キーワード】　総合的学習　　カリキュラム　　進路指導　　進路選択　　パネルディスカッション

Ⅰはじめに

研究開発3年目、最終学年の高校3年では総合人間科の目的である「自分の人生を自覚的に選択する力」が、この3年間の学習成果として実際の進路決定の場面で問われる。

これまでの2年間では、フィールドワークを中心とした個人研究とグループ研究を実施し、知的関心の形成と問題解決能力、体験・コミュニケーション能力、創造的表現能力、総合的思考力を評価の観点とした授業方法を模索してきた。昨年度の生徒と教師とのティーム・ティーチングでのテーマ授業や沖縄理解の一貫として行ったディベート等の授業方法での取り組みでは、生徒の自主的な取り組みが随所にみられ、期せずして「教師は指導教官ではなく、オブザーバーたれ」といった発言も生まれた。そして、今後の課題の一つとしてカリキュラム作りへの生徒の参加があげられた。「総合人間科の内容が生徒にとって意義有るものにするには、教師の立場に立っていろいろ考察していくことが必要である。しかしこれだけでは生徒にとっては授業計画作成への間接参加であることは変わりがない。教師の作った路線の上を走るだけでは、どうしてもやらされているという受け身の態度の生徒が現れ易い。これを少しでも防ぐために、授業計画作成への生徒の直接参加は高校生の場合、能力的に可能である。」（昨年度研究紀要より）

過去2年間の総合人間科の実践により生徒にはこの教科の目指すものが浸透し、問題意識の向上もあり、今年度は年度当初から生徒のカリキュラム作成への参加を念頭に実施計画を立てた。

また、一昨年と昨年の3年生が実施した進路系統別グループでのディスカッションや社会と自分の進路を語るスピーチを継続する一方で、これまで培ってきた能力を充分に発揮できるようそれらをより発展的に扱った。従来の一人一人のスピーチから最終的には各進路系統別グループの代表者によるパネルディスカッションへと発展させ、個人的な進路ではなく同時代の未来社会を築く仲間としての生き方の問題を学年全体で考える機会を設けた。

Ⅱ学年テーマと目標

高校1年「生命と環境」高校2年「国際理解・人権・平和」という学年学習目標を、それぞれ「いのちのネットワーク」「命どぅ宝－沖縄の心から平和を考える」とテーマを掲げて実施してきた。この発展として高校3年では、学年学習目標「生き方」を「My　Life－未来を語る」というテーマのもと展開した。3年間の学びを同じキーワード、いのち－命－Lifeで表し総合人間科としての統一やつながりを示した。

これまでの2年間の総合人間科では、これからの社会で直面する総合的課題を個人研究やグループ研究で「生命」「環境」「国際理解」「人権」「平和」というキーワードで考えてきた。こうした多くの課題を抱えた社会でこれからどのような生き方をしていくのか、これまでの学びで培ってきた総合的な問題意識や社会認識を基盤として、意識化を図り一人一人の広い視野に立った自覚的な進路選択を目指す。

また、個人的な進路だけでなく、共にこれからの

※1998年4月より　愛知県立豊田東高校

社会を築く仲間として何が求められるか、お互いに問いかけ、学び合い、社会の中での自己の存在意義を考えていく。

Ⅲ学習体制と形態

1　カリキュラム作成への生徒参加

昨年度高校2年では、1学期は教師主導型の指導体制がとられたが、2学期以降は研究旅行委員会がディベートやグループワーク、研究集録の担当責任者を出し、積極的に授業展開への提言をしてきた。

こうした経緯により、生徒自身がカリキュラム作成に関わる力が充分に育ってきていると考え、今年度は、年度当初から生徒主導型の授業年間計画や学習方法の検討を積極的に取り入れるよう指導体制を考慮した。

＜生徒研究委員会組織＞

4・5月　メンバー；室長・副室長
研究委員（各クラス2名）
担当教官（2名）
検討課題；年間計画作成
研究成果の表現方法

6月～　メンバー；研究委員（各クラス2名）
進路系統別グループ代表
（7グループ各2名。研究委員との兼任有り）
担当教官（2名）
検討課題；授業計画・授業方法の検討
各グループ授業の司会進行
各グループの授業情報交換

生徒研究委員会では担当教官側からの原案を審議したが、修正を加えるだけでなく積極的な新しい提案もなされた。例えば、これまでの学びを音楽で表現する（オリジナル曲の作成、全員合唱での卒業CD制作）ことやビデオでの記録は生徒からの意見で試みられた。

実際の授業展開の方法では具体的な指摘もなされ実施に活かされた。これまで2年間は指導教官の差によるグループ間の不満もあったが生徒主導型ではこうした問題の多くは解消された。

2　進路系統別グループ授業

一昨年、昨年の3年生に引き続いて実施した。同じ方向の進路を目指す生徒グループでの共通課題のディスカッションや学外講師との会話で進路意識や社会認識を高めた。

約20名の各グループには教官が一人ずつ加わったが、これまでのように指導教官とは呼ばず、アドバイザーとしての役割を考えた。従ってグループ名も教師の名前や番号で呼ぶことは避け、各グループ独自の発想で命名させた。

＜グループ編成＞

「人文集団」（文学歴史など人文系）	20名
「SGK」（社会を学問的に科学する）	17名
「The School of Engineering」（工学系）	19名
「Woods」（理・農・家政）	17名
「熱血医療24時」（看護医療系）	17名
「未来への鍵」（教育・心理系）	10名
「Art－カタリスト」（芸術・体育系）	16名
	計7グループ

3　スピーチとパネルディスカッション

進路系統別グループでのディスカッションやワークシート作成、学外講師による講義の後、クラス単位のスピーチ（全員）と学年全体でのパネルディスカッションを行った。

同じ傾向の進路を考えている仲間との話し合いから発展して、さまざまな分野への進路を考えているクラスの仲間のスピーチを聞くことで社会への視野を広げるとともに、さまざまな生き方を考える機会とする。さらに、学年全体のパネルディスカッションで、各進路系統別グループ代表からのそれぞれの視点から現代社会の課題をクローズアップし、これからの時代で考えていかなければならない問題を提起することで、確かな現実認識と時代感覚を問う場を設定した。

Ⅳ学習の経過

「生き方」を考える第一歩として、まず自分自身が進もうと思っている方向を確認するための進路に関するアンケートの実施からスタートした。（アンケート結果は＜資料2＞参照）その際、進路指導を単なる大学や学部、職業選択にとどめず、長期的な展望のもとでの人生設計となるよう心がけた。特に、これまでの2年間の総合人間科のテーマとして取り上げた現代社会をとりまく課題である「生命」「環境」「平和」「人権」「国際理解」を意識させながら21世紀社会のキーワードを考えさせた。ただし、あまり抽象的な展開にせず、現実の社会を知る機会を導入し、進路選択の意識化、動機付けを図る配慮をした。

具体的には、進路系統別グループでの目指す分野でのキーワードや社会問題のディスカッションや学外講師の招聘を通じて進路と社会をつなげる展開とした。

1．学外講師を招いてのディスカッション

第1回（4月19日）

オリエンテーション（生徒研究委員会主催）
学年テーマと目標
進路希望調査（グループ編成）
「生き方」についてアンケート
第２回（５月31日）
第１回進路系統別グループディスカッション
グループ名決定
社会と自分の進路
「生き方」アンケート結果について
学外講師の選定
第３回（６月７日）
第２回進路系統別グループディスカッション
学外講師の決定、事前学習
進路決定に向けてのワークシート
第４回（６月21日）
第２回進路系統別グループ
学外講師を招いて
講話とディスカッション

＜学外講師一覧＞

「人文集団」（人文系）
渡邊信和氏（PTA）
同朋大学仏教研究所所員
「SGK」（社会科学系）
柴田さとみ氏（卒業生）
老人福祉施設勤務
谷口　優氏（PTA）
弁護士
田中克典氏（卒業生）
税理士合格　資格申請中
阿知波真一氏（卒業生）
銀行員
「The School of Engineering」（工学系）
副島直樹氏（卒業生）
コンピュータ関係会社員
福和伸夫氏（スクールボランティア）
工学部建築科助教授
藤田秀臣氏（スクールボランティア）
工学部機械科教授
「Woods」（理・農・家政系）
武岡洋治氏（スクールボランティア）
農学部教授
「熱血医療24時」（医療系）
川原啓美氏
アジア保険研修所所長医師
「未来への鍵」（教育・心理系）
西出弓枝氏（教育学部）
助手　教育相談室
「Art－カタリスト」（芸術・体育系）
松沢恵美氏（卒業生PTA）
声楽家
大脇まどか氏（卒業生）
大学生　演劇活動
伊藤英明氏（卒業生）
音楽活動（ヤマハ）
道家歩氏（卒業生）
プロサッカーコーチ

＜学外講師を招いての感想＞

迫力ある話っぷりに圧倒されてしまったのだ

人文集団　渡辺信和氏　同朋大学仏教文化研究所
鈴木　克彦

文学、語学、歴史など文学部系の生徒のグループは、同じグループのメンバーの渡辺索君のお父さんに頼もうということになった。歴史を勉強したいという渡辺君は、改めて紹介するまでもなく、あの「鷹の目新聞」の編集長である。以前から鷹の目新聞の鋭い視点や取材力に注目していたが、さすがお父さんの渡辺信和氏だけに、ビシッと内容の濃い、またなんと言っても迫力満点のお話をしていただけた。国文学のうち古典学を人間学の勉強の一つとして学ぶ意義、研究者の研究活動や教育活動、国文学を学んで後の就職、郷土史家と研究者との違い等々確固とした骨組みのお話でした。

文学部での学問が学問として成立するには、科学として誰にでも分かることばや論理で説明されるものでなくてならないと人文科学研究の態度を分かりやすく解説してもらった。

聖徳太子の伝記研究では第一人者である渡辺氏は、高校から大学への進路選択は必ずしも一直線ではなかったと語られた。当時は理系で建築学科を希望されていた。ただし、その関心は寺院建築の構造にあった。このあたりが現在の渡辺氏を暗示するものがある。さらにそのころ勉強した数学が文系の大学へ入ってからも大いに役立ったそうだ。

名古屋という地域にある実学指向にもめげずに、本当にやりたい学問をやろうとのメッセージでお話は結ばれました。

以下生徒の声です。

「自分がやりたいと思う信念を持ち続けていけば、必ず実現するというのは大変勇気づけられた。私の将来なりたい職業も倍率が高くて、資格を100人とった内に３人しかなることができない。しかしこれを突破していきたいと思っている。そこで渡辺さんのお話を伺って、これからも信念を持ち続けていこう

と思う。」

「自分の好きなことをやってゆけるのが幸せだと思い、外国語を選んだが、やはり実学的かどうかと考えてしまう。また受験に必要ないと思うものは切り捨て傾向にある。こういう点が将来大学に入り社会に出たときに、必ず影響を与えるものだということを頭に入れておきたい。」

（鈴木克彦一言アドバイス　語学は十分実学です。それをやりたいというなら、自信をもって勉強続けてください。）

『未来への鍵』教育グループ

丸山　豊

講師は、名大教育学部の助手で、教育相談室の西出弓枝先生でした。先生は昨年11月に教育学部助手になり今年5月に結婚されたばかりの若い女性研究者です。私たち教育グループのメンバーは総勢10名、本音を出し合ってディスカッションできるなごやかなグループです。

この日は、学校とは何か、今の子ども達の様子、家庭などの問題を教育相談、カウンセラー活動を通して見つめていくことに目的がありました。また、職業をもって生きる1人の女性としての職業観、家庭、子育てなど、幅広く現実と高校生の将来を語り合うことでした。西出さんは大学卒業後も大学院で何年も研究を続け、臨床心理の現場の体験を積まれただけあって、生徒が次第に心を自然に開いて安心して語り出すような雰囲気の中で楽しく学べた時間でした。とにかく途中の休憩の時間も惜しんでカットしたくらいです。

最初に西出先生からちょっとした心理的アンケート？の用紙が配られました。学校…、家庭…、私…、先生…、といった質問項目のあとに自由に単文を綴りそれをもとに話し合いが始まります。

「学校ってどんなところ？」「人間関係をまなぶ」「出会いの場」「知識をまなぶ」「嫌い」いろいろです。その中にも「自分を発見していく」「自分を高めていく」などの体験が浮かび上がって生徒自身が学校を見つめ直していく…。私は「なるほどカウンセラーとはこうして隠れた意識を再発見していくのだなあ」と感じ、改めて自分自身の不勉強さに気づきました。

「父親」のテーマでは「いないと母と悪口をいってしまうけど、私は超えることができない存在」とか「忙しくてあまり意識してこなかったが、いま自分の将来を考えるとき改めて父の生き方を考える」など父親の役割の大きさに少し嬉しいような手遅れのような感想をもちました。

結婚後の仕事との両立については、女子らしい悩みが出ました。ただ、男子諸君が考え込んで黙っていたのが印象的でした。「結婚しても家庭、子育てと仕事を両立して、頑張る」といった意見が出なかったので「あれっ」と思いました。西出さん自身お子さんはまだですが、「子育ては仕事にプラスになるのでは」、「夫婦で協力して、社会的な制度も最大限利用していけば道は開けるのでは…」との話に一同納得していました。この後、育児休業、保育所、学童保育などの社会的問題に広がる予定でしたが惜しくもチャイム。

「子どもは社会の中でこそ育つものだね」「是非もう一度この続きを」といったところで終了。総合人間科ならではの中身だったと思います。

講師をまねいての総合人間科

長谷川　弘

前回の講師をまねいての総合人間科の授業を見ていて“心底”君たちがうらやましかった。自分は高3のとき進路に迷ったと、昔、学年通信で書いたが、本当に自分も高校3年生のとき今回のような企画があれば良かったな、と思った。みんなもそう思ったようで、学級日誌にもそんな感想が載っていた。

声楽家の松沢さん、演劇の大脇さん、ギタリストの伊藤さん、名古屋グランパスの道家さんと、多彩かつ各方面で活躍されている方の話は、本当に情熱的かつ刺激的でした。「『なれるかな』ではなれない。『なるんだ』、でなくてはなれない。」という話がとても説得的だったと思います。

私のグループは主に芸術・体育関係を希望する生徒たちで、いわゆる「夢追い人」。それだけに未来への「期待と不安」は大きい。今回のこの企画で、この「期待と不安」が、みんなの中でさらにどう発展するのか。今から大いに楽しみである。

グループ“Woods”武岡洋先生を招いて

槙本　直子

名古屋大学農学部教授の武岡先生からは、進路と言うよりも“人としての生き方”そのものを考えさせられるご自身の体験や考え方を伺うことができました。今年の総合人間科の学年テーマ「生き方を探る」そのものの時間が持てたように感じています。

武岡先生は、5年前にマラリアの予防薬（WHOで使用禁止になっていたものが処方された）による副作用で学術調査のスーダンで倒れられました。皮膚や体中の粘膜がただれ、生死をさまようような闘病

生活の中で支えになったのは、見知らぬ外国人に献身的な愛と奉仕を示して下さったスーダンの人々だったそうです。「スーダン人は貧しいが正直だ」と言ったスーダンの友人。この正直（honest）という言葉にはいろいろな意味が込められているとおっしゃっていました。物質的には貧しくても人に対する真摯で誠実な態度は、物質的に豊かな日本人にはみられないものかもしれません。先生のおっしゃった「ひたむきな」という言葉もとても心に響きました。

日本に戻られての闘病生活ではいわれのない中傷をされた、病状はスーダンの時より良くなったにも関わらずつらいものだったそうです。また、研究者の命とも言える眼（特に先生は電子顕微鏡を用いて研究されていた）をやられ、一時は失明し錯乱状態に陥られたそうです。これからの自分の生き方そのものが問われ希望を失ったとも言われました。幸いにも角膜移植を受けることができ片方の視力はいくらか回復されたそうですが、今も拒絶反応と闘いながらの生活で、他の人に支えられていることを実感する日々だそうです。

しかし、先生はこうした体験をされながらも、「視力を失って見えてきたものは人間の真実である」と言われ、誰を恨むでもなく常に前向きな姿勢です。自分と同じ様な薬害を二度と起こしてはならないと、一人の医師を責めるのではなく日本社会の構造的な問題ととらえ、教育的に訴えていこうとされています。そして、障害者となって感じたことをスーダンへの援助などの行動で示されています。

事前に資料を送って下さったり、当日はスライドでスーダンの砂漠化の様子やご自身の当時の病状（スティーブンス・ジョンソン症候群）を紹介していただいたりと先生の熱い心を感じる時でした。悲惨さを感じさせない穏やかで優しい態度、常に出てくる言葉はまわりへの感謝であり、先生がこれまで培ってこられた豊かで優しい人間関係が伝わってきました。参加した人の感想を読むと、先生の強さ（先生は決して強い人間ではないとおっしゃってみえましたが）やスーダンの人々の姿が強く印象に残ったようです。失ったものから学ぶこと、そして、スーダンの人から与えられた「ひたむきな熱意と奉仕」にきちんと答えることに感銘を受けた2時間でした。

学校の図書室に著書を2冊寄贈していただいたので、今回話を聞く機会のなかった人も、ぜひ読んでほしいと思います。

「遥かなる旅路の果てに」武岡洋治　七賢出版
「光遥かに－薬禍を超えて」武岡洋治　教育出版社

『The School of Engineering」（工学系グループ）』

湯澤　秀文

工学系グループでは、19人のメンバーをさらに3つのグループに分け、それぞれに次のような講師の先生をお招きしました。

◎コンピュータ関係：副島直樹氏　（株）メルコ開発部
◎建築・土木関係：福和伸夫氏　名大先端技術協同研究センター教授
◎機会・航空関係：藤田秀臣氏　名大工学部教授

副島さんは本校の卒業生で、昨年も高3のためにお話に来て頂き、好評だった方です。福和先生は振動工学・地震工学の専門家で、あの阪神大地震のときマスコミでコメントを求められたそうです。藤田先生は昨年度、名大生の就職担当をされていたそうで、具体的な就職状況のお話が聞けたことと思います。

当日は、先ず3名の講師の先生を全体で紹介した後、3つのグループに分かれ、代表生徒の司会で、自己紹介、講師の先生のお話、座談会と進めました。

お話や座談会の内容は、どのグループも、大学の講義のことやその学問分野のガイダンス、大学卒業後の進路のことが中心で、後は生徒各自の知りたいことや、専門的な話題が出されていたようです。

そんな中で、建築関係の福和先生は、鏡池線の都市高の建設に携わっていらっしゃるそうで、お願いすれば工事現場の見学も可能になりそうです。学校祭の分科会の一つにできるかも知れません。また、藤田先生のお話によると、名大工学部の学部長さんは、本校の出身だとか（未確認）。今後何かの機会にお話でも聞けると良いなと思いました。

全体としては、ビデオで撮影されているためか（？）、皆やや緊張気味のようでしたが、皆一生懸命話に耳を傾けていたようです。私の見たところでは、何を質問したら良いのか、何を聞けば本当の意味での進路選択の役に立つのか、といったところが明確になっていない人が居たようですが、今回のお話をきっかけにして考えられるようになれば、それで良いと思います。何らかの目的意識が芽生えると、受験や進路選択に対する気持ち・やる気・意気込みも違ってくると思います。

SGKグループ
柴田さとみさん（老人福祉施設勤務）のお話を聞いて

3．高校3年　カリキュラム作成への生徒参加とスピーチの発展としてのパネルディスカッションの試み

S3C　小崎　裕美

「しなきゃいけないという考えでやったボランティアは自己満足にすぎなかった。」という言葉がとても印象に残りました。

私は今までに何度かボランティアに参加しました。しかし今考えてみると私のボランティアも自己満足にすぎなかったのかもしれません。ボランティアや福祉の仕事というのは「～してあげる」というものではありません。むしろコミュニケーションを大切にし、相手との信頼関係を築くものです。

私は今祖父母と一緒に住んでいます。そして毎日この2人を見ています。だから私は老人福祉の仕事はしたくないと思っていました。

しかし柴田さんのお話を聞いて私の中にある「老人＝うるさい人、役に立たない人」という考えを変えなければいけないということに気づきました。まず、一緒に住んでいる祖父母とコミュニケーションをはかることが福祉を進路として選んだ私にとって一番の課題だと思いました。

第5回（7月5日）
　第4回　進路系統グループ別
　　ワークシートの完成
　　（スピーチの内容構想）
第6回（7月17日）
　生徒研究委員会から
　　総合人間科のまとめについて
　　・研究集録
　　・CD製作（オリジナル曲発表）

2　スピーチとパネルディスカッション

1学期に進路系統グループ別でディスカッションしてきた①これからの社会で直面する課題、②社会の中で自己存在意義、③将来の夢と現実の人生設計、これらを一人一人がまとめ、2学期ではクラス単位、学年単位での学び合いに発展させた。

自分の夢と未来を語り合う中で、同時代に生きる仲間とともこれからの社会の抱える課題を多様な視点からクローズアップすることを目指し、総合人間科3年間の総括としての学年でのパネルディスカッションに向けての学習経過をたどった。

過去2年間の高校3年で実践されてきたスピーチは継続し、パネルディスカッションへの布石として扱った。進路系統別グループからクラスに活動場所が変わることで、多角的に社会を眺めこれまで気づかなかった視点から未来を考えることが可能になり、生き方そのものにも多様性があることに気づく。グループごとの特色や相違性が明らかになると同時に、共通性を見い出す部分も多い。全員のスピーチを実施する中で、各進路系統グループごとに全体の場で取り上げるべき社会的課題を検討し、パネルディスカッションのパネリストを選出した。パネリストのスピーチ内容についてはグループのメンバーでアドバイスをしあい、またフロア（聴衆者）から出されるであろう疑問点や問題点も検討した。

また、スピーチの指導に当たっては、国語科の協力を得て、国語表現の2時間も用いて原稿作成、推敲を行った。スピーチの基本的な指導や評価の方法はこの国語表現の学習による部分も大きい。スピーチそのものもすでに授業で経験済みであり、スムーズに実施できた。

パネルディスカッションについては、パネリストやグループ紹介者の選出から、進行方法について、各グループの内容の検討に至るまで、生徒研究委員会の場で決定した。パネルディスカッション方法の事前指導、公開授業の授業案、タイムテーブル、座席配置、質疑応答の展開予想まで、ほとんど教師の手を煩わせずに生徒主導で進んだ。これまで3年間の総合人間科の学習により、学びの方法を学び、身についてきていることを感じた。

第7回（9月6日）
　第5回進路系統別グループディスカッション
　　スピーチの内容の検討
　CD製作準備（オリジナル曲パート分け）
第8回（9月17日）
　CD製作準備　オリジナル曲パート練習
第9回（9月20日）
　CD製作準備
第10回（10月4日）
　CD録音　全員合唱
　　オリジナル曲「道」　校歌
※国語表現2時間
　スピーチ「未来を語る」原稿作成・推敲
第11回（11月1日）
　スピーチ「未来を語る」その1（各クラス）
第12回（11月15日）
　スピーチ「未来を語る」その2（各クラス）
第13回（11月21日）
　公開授業　パネルディスカッション
　　「未来を語る」（学年全体）
第14回（12月6日）
　研究集録原稿作成

＜パネルディスカッション＞

実録　公開授業　高校3年総合人間科

1997／11／21

パネルディスカッション
「My Life－未来を語る」

司　会；本間綾一郎　後藤久美子
パネリスト；渡邊　　索　紹介者；小林　史幸
戸苅絵梨子　　秋山　知美
後藤　正輝　　小島　秀崇
青山　昌史　　澤田実樹子
小崎　裕美　　佐藤　　忍
内藤　慶子　　鈴木　陽子
安達　仁美　　吉原　勇気

本　間　：　今日のパネルディスカッション「My Life－未来を語る」は３年間の総合人間科の総括ということもあって、自分の夢と未来について２１世紀の社会の抱える問題を、いろいろな視点から考えていきたいと思います。

後藤(久)：　まず、パネルディスカッションについて説明します。パネルディスカッションとは立場の異なる代表者がパネリストとして問題提起を行い、その問題について皆で論議し合い、理解を深め、これからの問題解決の方法や行動を探るというものです。

今回は、進路系統別の７つのグループから１人ずつパネリストとして出て、自分の夢と未来を現代社会の問題とからめながら語ってもらいます。目的は相手を批判したり対立点を明確にするのではなく、同じ時代を生きる仲間として共通に考えなくてはならない課題をクローズアップし、ともに未来の社会を築いていく姿勢を持とうというものです。

フロアの人たちはパネリストの発表を聞いているだけではなく、質疑応答の時には主役となるので、発表をしっかり聞いて、パネリストの現状分析でいいのかどうかを考え、積極的にディスカッションに参加してください。

これからの流れについて説明すると、一昨日プリントが配布され、昨日、本間君の方から説明があったので分かっていると思いますが、最初にグループの代表者から今までグループとしてどんな活動をしてきたかグループ名の由来などを発表してもらい、その次にパネリストからこれから求められる課題などについて発表してもらいます。その後、この発表についての質問や意見、感想などを言う時間を３分程度設けますので、フロアの人はパネリストの発表をよく聞いて議論に積極的に参加して下さい。発表順は「人文集団」「ARTカタリスト」「ザ・スクール・オブ・エンジニアリング」「WOODS」「SGK」「熱血医療24時」「未来への鍵」の順番です。全員の発表が終わった後、このパネルディスカッションや３年間の総合人間科のまとめを行い終了します。あと、配布したプリントですが、これはメモとして活用して下さい。評価の対象にはなりません。書くことに必死にならないで、できるだけパネリストの方を見て話を聞きましょう。

最後にもう一度言いますが、このディスカッションは相手を批判するのではなく、互いの意見を聞いて、自分の意見を推敲したりして認め合うことも忘れないようにしましょう。

本　間　：　それではまずパネリストの紹介をしましょう。

後藤(久)：　人文集団の紹介者小林さん、パネリスト渡邊君。ARTカタリスト、紹介者秋山さん、パネリスト戸苅さん。ザ・スクール・オブ・エンジニアリングの紹介者小島君、パネリスト後藤君。WOODS、紹介者沢田さん、パネリスト青山君。SGK、紹介者佐藤君、パネリスト小崎さん。熱血医療24時から紹介者鈴木さん、パネリスト内藤さん。そして最後は未来への鍵、紹介者吉原君、パネリスト安達さんです。では、まず人文集団の小林さん、グループの紹介をお願いします。

＜人文集団＞

小林(史)：　私たち人文集団は、名のとおり人文系の集まりです。「人文系」というのは、主に文化、歴史、文学など、ほかのグループに比べて多岐にわたっています。そのため、一人一人が個性的な考えの持ち主で、話し合いでは、いろいろな意見が出て、まとまらないこともあります。

又、一学期には、これから話してくれる渡邊君のお父さんでもあり、同朋大学

講師の渡邊信和先生に、「名古屋は実学主義だ」などのお話を伺いました。

それでは渡邊君に「歴史を学ぶ意義と将来の夢」について語ってもらおうと思います。

渡　邊　：　私は、将来歴史の研究者、歴史家になりたいと思っています。それは、私が歴史が好きだからであり、歴史にこそ、自分がこれから生きていく上で、職業とするにたる意義があるからだと思うからです。

まずは、「私がなぜ歴史がすきなのか」「歴史にどのような意義が見いだせるのか」と言ったことをお話したいと思います。私が歴史を好きになったのは、小さい頃から父によく、城とか寺とか博物館につれていってもらって、古い物とか、昔の事を知るのをとても好きだったから。と言うのがあると思います。それから、「心から歴史家になりたい」と、思ったのは、ここに持ってきた2つの本との出会いなのです。シュリーマンという人の「古代への情熱」という本と、これは最近の漫画で、「マスターキートン」という漫画なんです。シュリーマンにしても、キートンさんにしても、実在架空の違いはあっても、古代への情熱に僕はあこがれて、本来見えない物を探し求める「歴史家」と言う職業に、憧れるようになりました。

「歴史家になりたい」という風に漠然と考えていたわけですが、「歴史を研究することとは何か？」というふうに深く考えるようになったのは、今年の学外講師の講義を聞いてからでした。講師の渡邊先生（実は父ですが）はこういいました。

人文系の学問は、「人間とは何か？」ということを探る学問である。というふうにいわれて、僕は、「歴史という物は、これまでに人間がとった行動を探ることによって、「人間とは何か？」を探る学問だ」と考えるようになりました。

ところでそう考えると、不思議に思うのは、今、学校で習っている歴史の授業です。学校の授業というのは、「1192（いい国）作ろう鎌倉幕府」とか、「1492（意欲に）燃えるコロンブス」とかいうように、歴史上の事柄と、その年号などを羅列して暗記しているだけではないでしょうか？私はこれでは、本当に歴史を学んでいるとは言えないと思います。なぜその事件が起こったのか？その事件の後どうなったのか？というのを学ぶのが、「本当に歴史を学んでいる」といえるのではないでしょうか？更にいうなら、歴史を学び、研究する本当の意義が、歴史上の事実の原因、過程、結果を学ぶことで、今の自分を振り返り、未来の選択に生かすことではないでしょうか？そして、これは、学校で歴史を学ぶことや、研究室で、歴史家が（歴史を）研究する事だけではなくて、人類全体が行わなくてはいけないことだと思います。

ここでみなさんに考えていただきたいのは、「歴史は人間が作ってきたものであり、その中にある様々な選択や試行錯誤を学び取り、研究するということは、未来を選択する上で、欠かしてはならないものではないでしょうか？」と言うことです。

本　間　：　それでは質疑応答に入りたいと思います。意見、質問等がある方は手を挙げてください。

冨　永　：　ちょっと渡邊君とは関係ないかもしれませんが‥。私が常日頃思っている疑問を聞いてみたいんですよ。

歴史を今学んでいますよね。この歴史が間違った事だと思う事ってありません？例えば、上の方の人からゆがめられて伝えられた、昔日本にあったような‥。そう言う事ってあると思いませんか？ほんとに「歴史って、どうやって知るんだろう？」って思う事があるんですよ。文献から知るとか、あとは、遺跡から調べるとか、そういうことなのかもしれませんが、それって、個人の見方ですよね？偏っていると思うんですよ。そのことをどうお考えでしょうか？

渡　邊　：　歴史というものは、これまでの実際あったことであるわけですが、もちろんそれは、見たこともありませんし、聞くこともできませんから、僕たちが体験した

事ではないので、必ず伝わる過程で、ある程度ゆがめられたり、要約されたりすることがあると思います。でも、事実はひとつですから、それをいつか必ず解明できる、と僕は信じているのですけど。同じ歴史を研究するにしても、複数の本を比較して研究したりするとか、そういうやり方で、より正しい、真実に近い歴史を学ぶことはできると思います。

冨　永　：　有り難うございました。

本　間　：　ほかに質問はないですか？それでは、「歴史」ということで、日本史の丸山先生から一言いただけますか？

丸　山　：　普段の授業で、こういう事をやってもらいたかったな。でも、残念ながら渡邊君、僕の授業をとっていないもんな。僕も今聞いて、「ああ、「1192（いい国）作ろう鎌倉幕府」と言う授業を、やっていたんだなぁー」って、反省しています。冨永君だったかな、一正君は、僕の授業を受けているから「おかしいんじゃないか？」って、どんどん突っ込んでください。一緒に討論しながらやっていきましょう。で確かにね、歴史というのは非常に難しい。でもね、事実は一つ。私たちも、事実は事実として、しっかりと受け入れていく。そういうことを学んでいかなかん。「おかしいな？」と思ったことは、自分で追求していく。そして、授業でもいいから、どんどん質問してください。ただ、高３ですから、センター試験とか、テストはどうだとか、社会はどうだったとか、細かなことはやらなければならないから、悩んでいるのは事実ですけど、「本当の歴史教育というのは何だろう」ということを、みんなと一緒に考えて行かなくちゃならんという、良い問題提起をしてくれたと言うふうに思っています。

本　間　：　それでは、この議論のまとめとして、渡邊君、一言お願いします。

渡　邊　：　ここにもたくさん人がいて、沢山の価値観があると思います。人間っていうのは、実に50億人いるんですよね。沢山の人が、それぞれ自分なりの行動をして、それが、まとまったのが歴史だと思います。人それぞれの活動をまとめた力っていうのでしょうか。そういうのが時代を動かしてきた。というのに感動します。

「これからの歴史は僕たちが作るんだ！」と大きな声で言って、私の問題提起のまとめにしたいと思います。有り難うございました。

本　間　：　ありがとうございました。

＜ＡＲＴ－カタリスト＞

秋　山　：　私達「ＡＲＴ－カタリスト」は、アート、芸術を語る個性豊かな人々の集まりです。このグループ名ははじめは「長谷川弘と愉快な仲間たち」とか「チームひろし」など楽しいグループ名候補がありましたが、長谷川先生のことを考えて、「ＡＲＴ－カタリスト」なりました。第１回目の授業では１人ずつ将来の夢をかたりました。一言でアートといっても音楽、映画作り、体育の先生、スポーツトレーナー、自転車のロードレーサー、美容師、デザイナー、社長など様々な夢をもっているのを知りました。将来アートで生活して行くのは難しく確率の低いってことを、皆実感している故に、情熱は人一倍に強いことだと思っています。今日はその中で音楽方面を目指している戸苅さんに発表してもらいます。

戸　苅　：　私は第１回の授業は休んで夢を語った覚えはないのですが、クラシック音楽というか、音楽芸術を志しています。今日はクラシック音楽の世界の封建的な体制について話をしたいと思っています。

現代の日本というのは民主主義社会で比較的自由な時代だと思います。みんなの中でも、進学にしろ就職にしろ、親の反対とかよほどの理由がない限りかなり自由な範囲で進路を決めた人が多いと思いますが、けれども、そういう時代の中にも古い封建的な制度がいまだ根強く残っています。その一つの例がクラシック音楽の世界です。

あるオペラ歌手の方に聞いた話ですが、大学の先生の演奏会のチケットを生徒が

売り歩くというのは当たり前のことで、そのチケットが全てさばけない場合は生徒が自腹を切るというようなことあるそうです。中には何も言わずにチケットと振込用紙を生徒に送り付けてくる先生もいるそうです。これは声楽、といって、クラシックの歌の世界のほんの一例ですが、こういった先生、生徒、そのまた生徒と、ピラミッド型の関係図というのはクラシック音楽会にはがっちりと確立されていて、現在でもそれは当然のように続いてきています。それでもそういった環境に溶け込めない人がやっぱりいてそういう人の多くは海外に移り住んで演奏活動を続けているそうです。このオペラ歌手の方はアメリカでレコーディングした際に日本とアメリカにおける音楽活動の環境の違いを意識したとハッキリおっしゃっていました。アメリカでは素晴らしい歌を歌った人には「よかった」と本当に素直にその人の実力をほめたたえます。けれども日本では本人の実力を見ても、どこの大学を出たとか、どんな先生に師事したとか、そういうところにこだわってオペラの配役にもそういったことを重視して不条理な決め方がされているようです。では、外国の方が日本よりも自由なのかというと必ずしもそうだとは言えません。

クラシックの本場はヨーロッパですから、ヨーロッパの方が当然歴史が古いし、古いものにこだわる傾向が強いですけれど、それ故に日本と同じ様な徒弟制度のようなピラミッド図が生きているようです。私はこういう強い縦割りの存在を知ってとても驚きました。実力勝負の世界だとずっと思い込んでいて、裏の世界があるなんて想像もしなかったからです。けれどこういった縦割りの社会は何もクラシック音楽に限ったことではないようです。

親から聞いた話ですが、歯科医師の世界でも、どの先生に師事したか、しないとか本人の技術よりもその人の上にどんな人がいるかという事で判断されるようです。求める物が同じでも、やり方が違ったりと、色々あるようなので、そういうことが気に入らないということがあるようです。

今まで学校という組織の中で比較的守られて生きてきたので、ほとんど何も社会のことを知らないんだなあということを改めて感じ、視野の狭さというのを本当に実感しました。どういう世界に進むにしろ、このような封建的な見方から起こる不条理さというのはたくさんあるから、覚悟しなきゃいけないのかなあと思います。けれども私はこういう事実にはすごい疑問を感じます。確かにその世界を目指す者にとって徒弟制度によるコネっていうのはすごく有利とか便利とか、そういう存在なんですけれど、そういう世界に生き残る為だけに上の者にペコペコするのはなんだか違うんじゃないかなぁって気がします。

私がこういうクラシック音楽の方向に進もうと決めたのは、目指す職業に就くために大学の名前が必要だからと言うのが大きな理由です。○○大学卒業という箔ほしさという不純な動機があるということには目を背けてはいけないことだと思うんですけれど、こういうのを学閥って言うらしいんですけれど、こういう職業に就きたいからこの学校を出るとかっていうことを言うんですけれど、私が目指す職業のために努力するっていうことは、学歴社会にはまり込むっていうことなんだなぁと言うことをとても思いました。それは私だけのことに限ったことではなくて、みんなの中でもそういうことを感じている人が多いと思うし、共通する重要な点だと思います。だからみんな考えていかなければならないと思うんだけれど、そういう学歴や学閥による就職や出世の格差というのが、あらゆるところで存在していて、封建的な見方やみんながどういう風に感じているのかなぁとか言って欲しいんですけれども、私はそういう古き－あえて悪しきといいたいんですけれども－習慣をもう一度見て、よく考えて改めて行く必要があるんじゃないかと思います。

本　間　：　ありがとうございました。昔からの習慣の固まっている点、自分の意志と実力があればすべてうまく未来が開かれるわ

けではないという矛盾を指摘した話でした。

では、同じアートの三ツ口さん。同じ音楽を目指している関係で一言お願いします。

三ツ口　：　戸苅さんの発表にすごい共感できて、私は歯医者さんのことはわからないけど、音楽の世界でやっぱり縦の関係がすごいあるって聞いたとき驚きました。日本と海外の違いっていうのは日本人の国民性なのかなあと思いました。あと、芸術の中でピラミッド型っていうのは、位の高い人のプライドがあってそれで今までの習慣みたいなので自分の先生もそういう風にチケット送ってきたりしたんだったら当たり前になりつつあることだからもう自分で変えようという意志があまりなくなっちゃったんだなあと思いました。だから、戸苅さんの発表を聞いて、自分はそういう世界に入らないで実力重視を目指していけたらいいなあと思っています。

後藤(久)：　では、戸苅さんのスピーチの中で学歴、学閥という問題が少し出たので、教育グループの人に意見を聞きたいと思うんですけど…。教育グループはいつも総合人間科の授業で議論が裂烈しているので、大野さんどうですか？

大野(里)：　あの、学歴のことについてですか？

後藤(久)：　教育問題全体で結構ですが、学歴の問題が出たと思うので…。

大野(里)：　よく教育グループでもそういうことを話してて、今の戸苅さんのスピーチで、なんかどの職業を目指すのでも大学の名前が必要というのを感じるんだなあって思ったんですけど、私も学歴重視の社会っていうのはすごく嫌だなあって思って、そのせいで今の教育が本当に勉強だけっていう風になっちゃってきていると思うんですけど、教育だけを変えようと思っても、社会が変わらなければ、教育だけが変わってもどうにもならないような気がして。で、私ははじめ教育グループにいたんですけれど、教育だけじゃなくて社会のことも学んでいきたいなあと考えています。

本　間　：　それではこの辺でまとめをお願いします。

戸　苅　：　えっと、学歴とか学閥とかはやっぱり今のみんなにとってすごく興味があるっていうか、目の当たりにしている大きな問題だと思うんですけれど、古くから受け継がれてきたものっていうのはやっぱり受け継がれてきただけ良いところはすっごくあると思う。だけど良いところをさらに良いものにしなければならないっていうのは、私たちの時代もそうだし、そのずっと後の人たちの時代もそうだと思うんですけれど、そういう良いものをさらによく後世に伝えなければならないっていうのは義務でもあるし、そういうことのためにも自由なのびのびとした環境を整備しなければいけないと思うんです。そのためにもやっぱり古き習慣って言うのは、もう一度見つめて改めなきゃいけないと思います。

本　間　：　ありがとうございました。途中で教育の話にも関わりが出てきたと思うので、最後に教育問題を考える場があるので、そのときにまたこの問題を考えてみたいと思います。

<ザ・スクール・オブ・エンジニアリング>

小　島　：　スクール・オブ・エンジニアリングは読んでの通り工学部系統の進路を目指す19名のグループです。19名のグループは早いうちから工学・理系の進路を決めており、ある意味ここまでやって来れたのは頑固だったからであるといえます。

一学期の学外講師を招いた授業ではグループを３つにわけ建築・機械工学・コンピュータの３つのグループで授業を展開しました。建築・機械工学は名大の先生方をお呼びし、コンピュータ系統は、本校の卒業生でコンピュータ関連会社に勤めている方をお呼びしました。

私は、この日本の経済は技術者によって発展していくのだと思います。その未

来について後藤君に語ってもらいたいと思います。

後藤(正)：　僕は、将来環境問題に取り組みたいと思っています。この問題は社会でも注目されていて、今理科系がとりくまなければいけないもっとも重大な問題であると思ったからです。それとそういう分野なら、自分で研究していても充実感が得られるのではないかと思います。もう一つ理由があって、高校2年の沖縄の研究旅行の時のフィールドワークで、宇井純先生という人の所に沖縄の海洋汚染について話を聞きに行きました。この先生は元々東大の先生だったのですが、大学の方針に反発して、正規の授業ではない自主的な勉強会等を開いて、公害問題や大学問題に取り組んだ人です。その結果東大にいられなくなってしまい、沖縄に来たという先生です。今でも沖縄で海洋汚染を研究して、生涯環境問題に取り組んでいる先生です。僕はフィールドワークで訪問したときはそんなことは全然知らなかったんですけれど、後から先生の本を読んだ時にそういうことを知って、この先生の生き方に感動して僕もこの問題に取り組もうと思いました。

つぎに環境問題に対する考えを話したいと思います。環境問題というとすぐに電気自動車・太陽電池など新しい技術が注目されます。でも新しい技術を開発するだけというのは、間違っているのではないかと思います。というのも、環境問題の解決には社会の仕組みや、一般の人の考え方が変わらなければいけないのではないかと思うからです。これまで日本は利益を得るために、ものを大量に作って大量に消費してきました。そのために無駄な消費も続けて、経済が活発化して、日本はここまで発展しました。だけどこういう生活を続けていたら環境問題は解決できないと思います。ここで矛盾が生じると思うんですけれど、環境の保護と経済の発達っていう、この2つが両方やらなければならないのに、反発しあう問題です。

僕は大学に入ってこういう問題を解決に近づけられるように、少しずつでも勉強していきたいと思います。志望の学科は経営工学科というところで、これは会社などの組織の運営の効率化を目指す分野です。大学案内を読むと、この分野が省エネルギー等にも役に立つのではないかと書かれていて、志望を決めました。これは工学部なんですが、物作りをするのではなくて、対象が社会問題であるという点が特徴です。

ここで具体例として、地球温暖化について話したいと思います。後10日ぐらいで、京都で地球温暖化を防止するための会議が開かれます。ここでは温暖化の原因である二酸化炭素の排出量を何パーセント削減するかという事が話し合われます。ヨーロッパでは15％、日本は5％、アメリカは0％という数字で、アメリカが一番消極的な姿勢を見せています。それでは何故アメリカが温暖化防止に積極的でないのでしょうか。アメリカは世界第三位の原油産出国で、しかも世界一位の輸入国です。すなわちアメリカでは石油会社が非常に大きな力を持っているのです。だから、アメリカの戦闘機は必要以上に飛んで燃料を燃やすし、アメリカ車の燃費は悪いままです。石油会社の利益を追求するために、必要以上に石油を燃やして消費して、そのおかげでアメリカは先進国でいられるのだと思います。逆に言うとそれをやめたときに、アメリカはもっと落ちてしまうのではないかと思います。

ここで問題提起をしたいと思います。僕は環境を保護するためには、経済が停まってしまうのは、ある程度仕方ないと思うのですが、これはどうでしょうか？あと、環境保護をしつつ経済も発展するという両方上手く行く方法は、僕はまだ分からないのですが、何か意見のある人がいたら聞いてみたいと思います。

同じ環境問題に取り組みたいと思っている人の他にも、物作りを目指す人や、経済・経営、発展途上国問題を志望する人の意見も聞いてみたいと思っています。以上です。

本　間　：　ありがとうございました。環境保護と経済の発展、後藤君の立場では環境を保護するためには経済発展が少しになるの

はやむを得ない、でも両立できるような考えはないかということですね。
それではこの間のアンケートに書いたことでいいので言ってください。

山　本　：　今まで人類は文明をとることで自然を捨ててきたので、これはやむを得ない結果として今日に至っているから、今手遅れな状態から180度方針を転換するのは難しいのではないかと思います。

後藤(正)：　今までは、人間に力が無かったので、開発をしまくっても良かったと思うんですけれど、ここ50年とかで力が大きくなり過ぎてしまったのだし、その変化が急激なものなので、そういう状態でこれまでのやり方を続けるわけには行かないんではないかと思っています。

青　山　：　今の後藤君の話を聞いていると、自分の身の安全は保障されているかの様に聞こえるんですけれど、たとえば経済が停まってしまったら不況が来るわけで、そうすると失業者がいっぱい出て、自分もその失業者の一人になりかねないと言う状況が、絶対に来ると思うのですけれど、自分が就職できなくて食べていかれない状態でも、経済を止めて環境を守ろうという気がありますか？

後藤(正)：　やっぱり最低限は守らなければいけないと思うんですけれど、そのことは経済とか政治とかを上手くやりくりしていくしかないと思います。それで僕が言っているのは、例えば石油会社がもうけるために必要以上に石油を燃やすとか、余分な無駄な部分を削れば良いんじゃないかという感じで言いました。

本　間　：　それではここで議論のまとめに入りたいと思いますので、後藤君一言お願いします。

後藤(正)：　初めに、新しい技術を求めるだけではいけないんじゃないかといったんですけれど、工学部等で、新しい技術を発達させることも必要ではないかと思います。というのも、今あるガソリン自動車のまではいけなくて、クリーンなエネルギーを開発したり、あと、インターネットの発達は在宅勤務を可能にして交通量を減らせるんじゃないかとか、そういう新しいことを開発することによって環境問題の解決にもつながるんじゃないかと思っています。

<WOODS>

澤　田　：　私達のグループは、理学部、農学部、家政学部を志望する人達の集まりです。自然環境や生活環境を科学的にとらえていこうという私達は、生態系＝緑、からの連想で、グループ名をＷＯＯＤＳとしました。この名前には一人一人が１本の木として根付くとともに、それが集まって豊かな森を形成していくという願いが込められています。また、今話題のタイガー・ウッズの活躍も考慮にいれました。
１学期には学外講師として、砂漠の緑化の研究のためにスーダンに行き、その途中でマラリアの予防薬による薬害にあい、失明に近い状態になられた名大農学部の武岡教授を招きお話を伺いました。武岡教授には、人間の真実とは何か、生きていくとはどういうことか、ということを話していただき、自分を見つめ直すことができました。
今日は、科学技術に対する考え方がみんなとは少し違う青山君に話をしてもらいます。

青　山　：　この中には、科学技術は発展し過ぎたので、もう発展しなくてもいいという人がいるかも知れませんが、僕は今社会が抱える問題をいい方向に向かわせるためにも、科学技術の発展は必要だと考えます。中でも、僕はバイオテクノロジーに注目しています。将来はそちらの方面の進学を希望しています。
「生物かわらばん」（生物の授業で配られるプリントですが、生物選択の人に借りてきました）の28号に、バイオテクノロジーの定義がありました。それによると、バイオテクノロジーとは、生物が持つ遺伝、繁殖、成長、自己制御、物質代謝、情報認識、処理などの機能を人間の生活に役立てる新しい生物利用技術です。今日のためにグループＷＯＯＤＳで集ま

った時に、生物選択の人から授業でみたビデオを見るとよいと言われ、見ました。ビデオの中には現在の最新のクローン技術が紹介されていて、クローン羊、クローンガエル、クローン猿などがすでに誕生していて、この技術を人間に応用すれば、クローン人間も可能か？というところまできているそうです。クローン人間は倫理上問題があると思うのですが、クローン技術に関しては、家畜の改良などに役立つのではないかと思って、素晴らしいなと思いました。そういうクローン技術をはじめとする遺伝子操作の技術を、生物の槙本先生の話によると、大半の人は批判的だということを聞きました。あと、科学が発展するために使われる実験動物にも批判的だという人が多いと聞いて、ちょっとびっくりしました。僕は、そのバイオテクノロジーの発達における問題というのは、使用する方向にあると思います。僕はその方向を決めるのは科学者だけではなく、その社会だと思っています。そういう意味で僕の意見への感想などを文系（経済学部など）を志望している人にも言ってほしいと思います。

あと、実験動物に関してですが、僕は両親がそういう実験動物に携わるような仕事をしていたので、小さい頃からそういう話を聞いていて、抵抗がありません。あまり実験動物がかわいそうだという人のことが分からないので、そういう人の話を聞いてみたいと思います。

山　上　：　私は科学技術の研究について反対の意見しか持っていません。私も生物の授業でビデオを見たんですが、その中のクローン禁止法というので、人間にはまだダメだけど、動物の実験だったらいいという案が出されていて、私は今まで見てきたビデオなどで、科学者達は動物なら何をやってもいい、という風に考えているようで、なんかおかしいなと思っています。

青　山　：　やっぱり命あるものは大切にしないといけないと思うのですが、現在、人間に食べられるために生まれる動物というのは、家畜としてですけど、たくさんいるというのを考え、それをふまえた上で、かわいそうだがしようがないと思っています。

山　上　：　でも、食用にするというのは、食物連鎖の上で本当にしょうがないことで、動物ももし餌がなかったら生きていけないし、人間を襲うかも知れないし、こういうことは今まで自然界の中で成り立ってきたことなのだけど、そういう技術などの利用するというのは、人間が偉くなったということでできてしまうことだと思うので、全然しょうがないことではないと思います。

本　間　：　全然しょうがなくないって。　青山君、どうですか？

青　山　：　実験に使うというのは、勿論技術というのは人間社会をよくしていこうという考えの上で実験しているわけですから、その実験でできたものを、人間におろす前に動物さんにかわり実験になってもらおうという方向だと思うので、例えば動物で異常が発見されるというのと、人間におろして死者が出るというのでは、やはり動物さんに犠牲になってもらうしかないと思います。

本　間　：　青山君は文系の人の声も聞きたいと言っていましたので、誰か文系の人で発言する人はいませんか？

では、文系代表として渡邊君。

渡　邊　：　人間のためなら、動物を犠牲にしてもいいという考えなんですが、それがもし人間同士でそういう議論があったとき、例えば日本人がこれから生きていく上でアメリカ人がどうなってもいいとか、あるいはその逆などが起こる可能性もあります。そういう場合はどうでしょうか？

本　間　：　青山君どうですか？　ちょっと青山君つらそうですね。誰か青山君を応援してくれる人はいませんか？　あ、平田君、どうぞ、お願いします。

平　田　：　日本人のためになら他の人が犠牲になってもいいというのは、僕たちが発展途上国、東南アジアの人々にすでに無意識の内にやっていることです。だから、これからそうなったらどうしますかという議論は不毛です。あと一つ、バイオテクノロジーの否定についてですが、技術の悪い点だけを見てそれを否定してしまうのは、飛行機が戦闘機に使われるから否定してしまうだとか、火事が起こるから

火を否定することと同じです。

本　間　：　この場は対立する場ではないのですが、いろんな意見がでましたのでみんなの考えをちょっと知りたいと思います。手をあげて下さい。まず、人間が大事、人間のためなら多少の動物の犠牲は仕方がない、と思う人は手をあげて下さい。 おっ、だいぶいますねえ。では、命は命、動物の命も大切にしなければいけないと思う人は手をあげて下さい。　あ、これもずいぶん多いですねえ。だいたい半々という感じです。　青山君、みんなの意見が分かれるほど微妙な問題ですね。この結果を参考にして、将来科学者青山として頑張って下さい。　では、青山君からまとめをお願いします。

青　山　：　これからの科学者は、社会をもっと学ばなければならないと思います。自分にしか分かっていないから社会は分からなくてもいいんだなどの意見では、もうダメだと思います。それに、社会ももっと科学を学ばなければならないと思います。自分の知らないところで科学者だけが何か話を進めているというのは、すごく怖いことであり、また身近になると自分の生死に関わることだと思っています。そういう意味で、これからは科学者も社会も変わっていかないといけないことだと思います。

＜ＳＧＫ＞

佐　藤　：　私達のグループＳＧＫは最初決めた時は、先生の名前をとって、ソーシャル・グレート・カワタ＝「社会・すごい・川田」だったんですけど、いつのまにか先生が「社会を学問的に考えるグループ」と変えていました。このグループは、社会系への進学を考え、将来は法律関係、公務員、スチュワーデス、銀行員、福祉関係の就職を考える人達のグループです。学外講師にはこれらの職業について、ＰＴＡ関係者、卒業生の人達に、とても貴重なお話を聞かせてもらい、多くの質問に、とても丁寧に答えていただくことができました。そして、私達はあらためて、社会で働くことの責任の大きさ、大変さを実感しました。直接その職業の人の話を伺える機会があり、私達それぞれの目指す職業への想いはいっそう強くなりました。

その中で今日は福祉関係への進路を考えている小崎さんに発表してもらいます。

小　崎　：　私が進路を福祉に決めた時、友達は「偽善者だね」って言いました。その言葉を聞いて、私は悲しくなりましたが、自分は偽善者で終わらないようにしようと、さらに強く福祉の道に進もうと思いました。そういった意味で、私はその友達にとても感謝しています。

私は阪神淡路大震災で伯父を亡くし、ボランティアに興味を持ち始めました。高１になって総合人間科が始まり、フィールドワークでボランティアに参加しました。その時のボランティアは、フィールドワークでどこかに行かなくてはならないからやったという感じで、自己満足にすぎませんでした。２年の時は部活が忙しくてボランティアには参加しませんでしたが、進路を本気で考えなくてはならなくなった時、１年の時にやったボランティアが自己満足にすぎなかったことを思い出して、今度こそ人のためにやってみようという思いがあって、部活を引退したあと、犬が好きだということもあって盲導犬のボランティアに参加しました。いつも募金の手伝いをしながら、募金をしてくれる人達はどんな気持ちなんだろうなと思います。盲導犬育成の募金は、他の募金とは違って、「ご協力お願いします」ということを声に出して言いません。ただ、犬の隣に立って、募金をしてくれた人に「ありがとうございます」というだけです。つまり押しつけがましさがありません。それでも募金をするということは、役に立ちたいという思いがあるからではないでしょう。

さっき人のためになろうと思って、ボランティアをやったと言いましたが、３年の夏休みにやったボランティアで、人のためになろうという思いではいけないということに気がつきました。知っている人もいると思いますが、私は自分のおじいちゃんが嫌いです。そんな私が老人ホームでボランティアをしました。私は老人＝うるさい人とか役に立たない人というイメージしかなくて、はっきり言っ

て老人ホームへは行きたくありませんでしたが、これから老人が嫌いという考えではやっていけないという思いがあったので、老人ホームへ行ってみました。実際に行ってみると私のイメージしていたお年寄りはいませんでした。半分以上のお年寄りがぼけちゃってて、「わしはまだ飯を食っておらん」とか言って隣の人のものをとって食べ始める人だとか、迎えとか全然こないのに「下に迎えのバスが来るんじゃ」とか言って降りていこうとする人がいて、家のおじいちゃんは全然ぼけていないので、今まで自分の見たことのない世界があったことにびっくりしました。私は老人ホームで3日間ボランティアをしてみて、こんなおじいちゃん嫌いの私が、老人ホームのおじいちゃんおばあちゃんには優しく接することができるんだと発見しました。そして、満足感とは違う何かを感じたのですけど、それが今思えば充実感、つまり自分のため、新しい自分の発見だったのです。

話は変わりますが、みなさんは友達や自分の好きな人が困っていたらどうしますか？普通は力になろうとしますよね。福祉というのはそれが社会に広がったものだと思います。今、私達は健康に生活していますが、谷口君のように、いつ事故にあってけがをするか分かりません。また、自分の親がご飯を食べたか食べていないか分からなくなっちゃうような老人になって介護が必要になった時、皆さんは自分で何とかできると思いますか？福祉やボランティアのサービスは必要ではありませんか？福祉は偽善的で自己満足にすぎないという考えを持っている人には、まずボランティアに参加してほしいと思います。ちゃんとしてみてもやっぱり偽善的で自己満足にすぎなかったと思うならばそれはそれでいいと思います。人によって考えは違うと思うからです。ただ、福祉というものが他人ごとではすまされないものだということを忘れないで下さい。

私もまだうわべだけのことしか見ていないということもあるので、これから大学に進学してもっと福祉について考えたいと思います。

本　間　：　次は、この間のクラスで行ったスピーチですごく良い意見を言ってくれた人がいるので、山口さん、お願いします。

山　口　：　私は、ボランティアに反対しません。“偽善者で終わりたくない。”だとか“新しい自分を発見。”などけっこうです。おおいにやってください。

私が疑問を抱いているのは、“ボランティアをしている側の気持ちと、人の助けを受ける側が、本当に必要としているのはなんなのか？”ということです。

11月1日のスピーチで、医療のグループの人たちの話を聞いて（あ！そうか。）と思えるのもあったけど、これは私個人が思ったことですが、（え！ボランティア。楽しかった。そんだけ？何を考えとるんだこいつら！）と思った人もけっこういました。

私のいとこも、障害を持っています。私もいとこの家族も、障害を持つ彼にとって、どこまでが彼にとっての社会的自立の助けになるのか解りません。今でさえそうです。家族でさえそうなのに、他人のあなた達に何が出来ますか？彼らの人生をまるごとあなたの人生の一部に加えるというように考えられますか？私には出来ません。ボランティアというものはそういうものですごく難しい事だと思います。

それは、やらないよりはやった方がいいけど、それが誰のためのボランティアなのか考えて下さい。確かにボランティアをした方には思い出になります。でも、彼らにとっては全然違うんです。彼らは、次の日も、その次の日も、あなた達がボランティアをしない日もその障害を背負い続けなくてはいけません。

あなた達の中のボランティアは、あなた達の自己満足なだけでしょうか。それとも、彼らをいたわる優しさの表れでしょうか。彼らの障害が一生彼らについてまわるものだと忘れないで下さい。どうしてもボランティアをしたい人は、小崎さんみたいに、（生涯やっていきたい。彼らと過ごしていきたい。）という気持ちを持っていて取り組んでほしいと思います。

それから、彼らがボランティアをしているあなた達に何を求めているか考えて

下さい。それは少なくとも、あなた達の安易な同情ではないはずです。彼らは一人一人の人間として、社会的自立をめざしています。ボランティアはそのためのものだと思います。

（彼らと一緒に手を携えてがんばろう）ということをあなた達みんなが思う文化、そういう文化が当然となる社会が、彼ら障害者にとってより幸福に思える社会だと私は考えています。

本　間　：　ボランティアをしている人にはきびしい意見だったかもしれませんが、実際ボランティアに小崎さん以外に参加した人がいるので、原さんも一言お願いします。

原　　：　私は、ボランティアサークルという大会に参加しました。正直言うと始めは傲慢な態度で障害者を見てて、障害者に対してまったく関心がありませんでした。でも、実際に障害者に接し一緒に過ごすことによって、今までの自分を変えることができました。だから私はボランティアというものは、障害者を社会の一員として考える第一歩だと思います。

でも、ボランティア活動をしたことがないのにボランティア活動を嫌って反対したり、今でも障害者に対して偏見を持っている人は少なくはないと，思います。その人達に私はいつも自分の意見がうまく言えません。小崎さんがこの人達にどうやって理解してもらうのか教えてもらいたいです。

本　間　：　解りました。それでは小崎さん、お願いします。

小　崎　：　さっき山口さんは、ボランティアは障害者のためにならないと言いましたが、ボランティアというのは障害者の人と健常者とが接することで、このことがなくなると障害者に対する差別や偏見などが生まれると思います。そのことを無くす為にボランティアは有効な手段だと思います。

車椅子で町に出てみると、どれだけ段差が多いか、バスのステップの上り下りがどれだけ大変かが解ると思うので、ボランティアを一度はやってみたほうがいいと思います。

本　間　：　あと吉原君どうですか？

吉　原　：　僕は高校一年生の時、ボランティアをしてボランティアについて疑問を持ちました。それはなぜかというと、ようするに＜自己満足で終わってしまうのではないか＞とボランティアをしている人に対して思ったからです。

僕はボランティアの体制についても疑問に感じていることがあります。僕たちは、小学校・中学校と義務教育をしてきて、はたしてボランティアについて学んだでしょうか？もしかしたら特別な授業として一日だけやってみたということがあったかもしれませんが、僕たちは必須の授業としては学んでいません。

ところが、ボランティアをする前に講習会というのがあったんですが、プリントが配られ代表者やボランティアが必要な人の話を聞いただけで終わりました。当日、ボランティアに行くといきなり知的障害者を任されました。実際、何をどうしたらいいのか解らなくて慣れている人に聞いたら「一緒になって楽しんでくれればいい」と言われました。

でも、はたしてそれで良いのでしょうか？

他にも疑問があります。募金を募るテレビ番組＜愛は地球を救う＞で～去年はいくら集まって何台車を買いました～という決算報告みたいなのがあります。しかし実際車は一台いくらするのでしょうか。そしてその車を何処に何台送ったのでしょうか。そういう細かいものをやったでしょうか。街頭で募金をしているボランティアの人達にその募金は何処に集められて、何処に持っていかれ、どの様に使われるのかということを聞いたとき、はたしてそのことに対して答えられるでしょうか。僕は小学校の時、委員会の活動として募金活動をしたことがあります。でも、そういうことは一切聞かされませんでした。ただ、「募金お願いします」と元気よく言っていればいい。と言われ、そういうものに疑問を持ちました。

僕はボランティアをする事よりもまず、身近な人から介助をすることのできる人にならないといけないと思います。

さっき小崎さんは自分のお爺ちゃんは好きでないと言っていたけど、そういう人が実際他人の世話をするというのは、

結局は学校の体制にも問題があって、推薦入試の欄にはボランティアをしたか、というものがあります。ということは、社会的にボランティアをすることは良いこと、つまり、世間に認められる事として受けいれられています。

だけどそういう普段自分のお爺ちゃん、お婆ちゃんの世話、またはそういう繋がりをあまり大切に出来ない人がボランティアをすることは結局、自己満足、または、まわりに認められたい欲望、そういうものが大きいと思います。そういう風にならないようにするには、今の日本社会の資本主義の体制の中にボランティアを組み込んでいく姿勢が大切だと思います。

小崎さんは今のボランティアの体制に付いて、僕みたいな疑問は一つや二つ有ると思うんですけど、そういうものに対してどうしていったらいいと思いますか？

本　間　：　最後のまとめとして小崎さんに一言お願いします。

小　崎　：　ボランティアをそういう利潤を目的にすると、介護を受けられなくなる人が出てくると思うんですが、そうなると本来の福祉の意味がなくなってしまうと思うんです。

確かに私は自分のお爺ちゃんが嫌いだと言ったんですが、今一生懸命お爺ちゃんに心をひらくことに努力しています。

今みんなから出た意見を参考にしながら福祉がみんなにとって身近に感じられるような社会を作ることに貢献したいと思います。

＜熱血医療24時＞

鈴木(陽)：　医療グループは、みんなの医療に対する熱意と某テレビ番組のタイトルを参考にして「熱血医療24時」というグループ名を選びました。1学期の学外講師は、ネパールで医療活動をしていたアジア保健研修所所長の川原先生から、病院が少ないために毎日歩いて病院にたどり着いたお話や、ガンの足を切断して命をつなぐよりも家族の負担を考えて命を落とすことを選ぶ人のお話などを聞き、世界における医療活動の現状や奥深さに感銘を受け、医療に対する考えが深まりました。

私達「熱血医療24時グループ」は命に関わる仕事につこうとする熱意の現れで、みんな真剣に授業に望んでいます。それでは、内藤さんお願いします。

内　藤　：　私は、今の世界の医療の現状に疑問を持っています。日本やアメリカなどの先進国では、医療も十分行き届き、研究もどんどん進んでいますが、発展途上国といわれる国々では、技術も先進国に追いつかないばかりか、医者の数さえ少ないという現状です。人の命は平等であるはずなのに、このような差があっていいのかと考え、医者として発展途上国で働くことを考え始めました。

私は高校2年生の時に1年間オーストラリアへ留学しました。その理由は、英語が必要であるということもありましたが、何よりも外国という雰囲気を知り、価値観を知り、そして自分の視野を広めることが大切だと考えたからです。そこでの体験は、様々な面で私の考えや夢に影響しました。私はオーストラリアに行き、初めて自分が少数民族の立場になり今思い出しても泣けちゃうような差別を受けました。そのような差別を受けることで社会的弱者の立場になってものを考えるということの本当の意味を分かったような気がします。それからオーストラリアでフライングドクターという存在に出会ったことも大きかったです。フライングドクターというのは、オーストラリアの砂漠地帯に住んでいる人々のためにセスナ機に医療機器を積んで、往診する医者のことなんですけど、それまで私は大学で一応人体のすべてのことを勉強するとはいえ、外科に進んだ人が内科のことを、内科に進んだ人が外科のことをきちんとカバーできるのかなという不安があったんですけど、フライングドクターは、大がかりな手術まではしないものの、そこに住む人々が普通の生活を完全にできるぐらいまでの医療技術を提供することができるのを知って、自分にもできるんじゃないかなと思えるようになって、夢がただの希望だったのが決意に変わりました。で、そのような気持ちがあったにもかかわらず、高校2年の時まではな

かなか思うような活動ができなくて、青年海外協力隊に行きたいなと思っていたんですけどそれは20才からで、全然年が足らないし、何もできなくていらだちがつのっていたんですけど、高校３年の総合人間科の授業の時に学外講師をお招きして話を聞く機会があって、その時にお会いした川原先生のお話を聞いて、自分のやろうとしている仕事の難しさや心構えの必要を知りました。しかし、それよりも何よりも30年前のネパールでの医療技術と現在の医療技術がほとんど進歩していないと知って、なお決意が強くなりました。

将来私はアフリカに行って仕事をしたいと思っています。なぜなら、私が初めてこの仕事につこうと思ったのが、ソマリアでの難民キャンプを見た時だからです。あと、アフリカではやはり人種差別というか、民族問題がもとで内戦とかが起きているので人種差別を無くしたいというのも大きな理由で、アフリカで働くことを決意しました。具体的には国境なき医師団のように３カ月とか短い単位で仕事をするのではなくて、できれば自分が現地に住んで現地の人達の中に入って、感染症の予防とかにも力をいれて行きたいと考えています。

本　間　：　ありがとうございました。だいぶ時間が押してきています。申し訳ないんですが、引き続き未来への鍵のスピーチに移らせてもらいたいと思います。質疑応答は最後に二つまとめて行いますので、未来への鍵の紹介者の吉原君、お願いします。

＜未来への鍵＞

吉　原　：　教育グループは女子八人、男子はたった二人という少人数のグループです。いずれも社会や教育問題に関心を持ったメンバーで、論議が土曜の二時間では足りないほど白熱することもしばしばでした。時には収拾がつかなくなることもあり、普段はオブザーバーとして冷静に耳を傾けていらっしゃる丸山先生がヒントとなる意見を出され、そしてまたそこから論議に火がつくこともありました。さて、教育グループの名称は未来への鍵です。世の中には無数の閉ざされた扉があります。それは可能性という扉です。この扉が開かれるとき、一つの未来が広がります。そして未来の扉を開けるためには未来への鍵が必要です。では未来への鍵とは何か？それは僕ら一人一人の挑戦です。これから発表する安達仁美さんはこんな挑戦をしています。安達さんは世界寺子屋運動スタディーツアーに参加して、内戦終結後のカンボジアで読み・書き・計算を教えている寺子屋を視察してきました。そこで彼女は何を学んできたのか？ここで安達さんの発表へ移りたいと思います。

安達(仁)：　私は去年の年末から今年の初めにかけてカンボジアまで行って来ました。そこで私は数え切れないほどたくさんのことを得て、それが今でもあまり上手く整理できていないのですが、去年の最後の総合人間科の授業でもカンボジアの紹介をしたんですが、この気持ちをどう伝えて良いのか分からなくて、みなさんに上手く伝わったかどうかとても不安でした。私は将来具体的には決まっていないのですが、何らかの形で教育に携われる仕事に就きたいと思っています。それで、今回私が将来を考えるのにも大きな影響を与えた、カンボジアの勉強について話したいと思います。

カンボジアではポルポト派時代に学校という存在自体が否定されていて、教師や生徒は見つけられ次第殺されてきました。学校が収容所となって処刑場になりました。今ではその内戦への影響や、困難な国の財政のために、教育状況がとても悪いのです。普通の学校に通う人はすごく少なくて、普段習えない人がほとんどです。私はそれらの人に読み書きやそろばんを教えている寺子屋を訪問しました。

教室といっても私たちが使っているような立派な教室ではなくて、机も一人一つないし、長いいすに込み合って座っている状況です。教科書やノートも一人一冊無くて三人で一冊使っていたり、そんな恵まれた物ではありません。私はそこの寺子屋で生徒との交流時間に「学校で一番楽しいことは何？」という質問をし

ました。そうしたら、その生徒たちは「学ぶことが一番楽しい」と返してきました。また私が「家では何をしてるの」という質問をしたら「家では仕事の手伝いをしている。本当は家でも学びたいんだ」という答えが返ってきました、また教育を受けた生徒は将来希望を持っていて、「将来何になりたいの？」と聞くと、「先生になりたい」とか「裁縫の先生になりたい」「自分の店をしたい」など具体的な答えが返ってきました。それが田舎の方の小さな村の、まだ教育を受けていない子供に質問すると答えが返ってこなくて、私は教育を受けて初めて自分の将来を考えられるんだ、私たちも今将来の夢とかを考えているが、それは教育のおかげなんだということを、そこで知りました。

私はカンボジアの寺子屋の子供たちの学びに対する姿勢に本当に感心して、自分のことを振り返ると、カンボジアの子供たちのように、学ぶことに感動することもないし、将来に希望を持てるかというとやっぱり自分の将来のことを考えるととても不安です。日本と発展途上国の教育を比較するのはすごく無理だと思うんですけれど、学ぶという行為は日本と変わらないと思います。

カンボジアには日本のような自殺にまで追い込むいじめや、登校拒否などは存在しません。勉強をストレスに感じることもありません。では私たちがカンボジアの子供のように教育に喜びを感じるには、どうしたらいいのでしょうか。私は、みなさんそうだと思うんですが、自分の興味のあることを学んで、自分で興味のある授業は学んでいてもとても楽しいと感じると思います。私は自分で興味のあることを進んで学びたいと思ったときに、学ぶことの楽しさや喜びを感じられるのではないかと思いました。今の日本では、学びたいことは何かと深く追求することのできる時間がないように思います。学歴社会という仕組みががっしりとして、知識の詰め込みに時間をかけているため、そういうゆとりがとれないのだと思います。社会の仕組みを変えるのはとても難しいし、時間のかかることですが、私は将来こういう事を大学に行って勉強したいと思います。

本　間　：　熱血医療２４時と未来への鍵の２人からの発表でした。この話を聞いての質疑応答に入りたいと思います。

後藤(久)：　私達のクラスのスピーチの時に、発展途上国の問題に関心があると言っていた人がいるのですが…。　柘植さんお願いします。

柘　植　：　発展途上国での教育のことは、その国を作って行くのは子ども達でその子ども達が教育を受けていなかったからどうにもならないからそれはすごく大切だと思います。それと、その寺子屋運動を運営するにもお金が必要で、そのお金を一番上手に使う使い方を勉強するのも大切だと思っていて…、そういう風に新聞に書いてあったんですね。その、発展途上国に携わる人は、経済のことを勉強してほしいって書いてあって、だから、私は、いろいろなことをやらないといけないけれど、私も発展途上国の仕事につきたいと思っているんですけど、何をやればいいか、まだ分からなくて。だからそういう一番上手にお金を使える道を勉強したいなって思っています。

今　井　：　私は高校１年の総合人間科の授業で青年海外協力隊の活動について研究したんですけども、フィールドワークでアジア保健研修所の方と国際協力事業団の方々を訪問させていただいて、現地で活躍されていた人々のお話を聞くことができたのですけども、やっぱり話を聞いていて文化も言語も習慣も違う国でそういう教育をしていくことは、本当にそんな甘いことではないなというのも実感しました。そして、その教育する側とされる側を、ただ教える側と教えられる側ととるのではなくて一緒の目の高さに立って一緒に物事を考えていく、一緒に活動して、一緒にお互いに学び合うという、そういう活動をしていくことが大切なんだと学びました。

だから、途上国で活動していきたいという人もいると思うんですけど、お互いの信頼関係を築いて、気持ちを通じ合わせて頑張ってほしいなと思います。

木　村　：　私も将来できれば海外へいって協力隊に入りたいと思っているんですけど、そ

れは内藤さんと同じように海外協力をして、ま、協力っていうことは人のためという感じとは違うんですけど、海外へ行くということが人のためではなくて何よりも自分の視野を広げるためだと思うからです。今は、ボランティアとか南北問題とか環境問題ということがマスコミとかによって氾濫していて本当の問題のあり方とか、あと、いま改善が求められているようなそういう問題を解決する糸口が見つからないような状態になっていると思います。よくこういう協力隊に行きたいとか、ボランティアをしたいという人に対してたった一言で「へえ、すごいねえ」とか「それはエゴじゃないの」とか言う人がいるけれども、このパネルディスカッションを機会にぜひそういうことも考えていってほしいなと思います。

後藤(久)：　最後にずっと教育に興味があると言っていた、加藤さん、お願いします。とっても勝手で無理な注文ですが、時間がないので短くまとめて話してくれませんか。

加藤(三)：　私達は総合人間科でまず何をやりたいかと考え、自分でそれをどうやったら実現できるかということも自分で考えて、そして自分でやっていくという訓練を繰り返してきて、私は学び方を学んだというように思います。そして、自分で何かやってみようと思うのは、ある程度学校生活にゆとりがあって、気持ちにも余裕がないとそういう風に思えないと感じています。私は、将来先生になれたらいいなと思っているんですけど、自分でうまくいくか分からないけど、でも、自分でやってみようって思える子どもを育てたいし、そういう風に子どもが思えるようなゆとりのある環境を作っていきたいと思っています。

本　間　：　では、内藤さん、安達さんから一言まとめてもらいましょう。

内　藤　：　皆さんの意見を聞いて思ったのは、私も自分のやりたいことを実現させる厳しさをもっときちんと分かった上でやっていきたいと思いますし、木村さんの言われたように私のやりたいと思っていることは一見するとエゴのように見えてしまうかも知れないので、そういう点をもっと皆さんに理解してもらえるようにしながら進めていきたいと思います。

安達(仁)：　私はさっき学びたいことを深く追求できる時間をもっともてるといいといったんですが、今まで総合人間科をやってきて、高一の時に好きなテーマを決めて追求できる時間を持てて、みんなの中にも総合人間科を通して自分のやりたいこととかを見つけた人がいると思いますが、この授業が今年で終わっちゃうのが残念で、これからもこういう時間が持てたらいいなあと思います。

本　間　：　これで七人の発表が終わったわけですが、これが今まで三年間やってきた総合人間科の総まとめとなります。総合人間科っていうのは、僕たちが高校生ではたぶん一番初めてやる授業だったんですが、一番初めはやっぱり、はっきり言ってしまえば受験科目に無いということで、すごくみんな入り込むのにも戸惑いがあったし、やりづらかった点とかもあったと思いますが、でも実際やってみて、今までずっとやり続けてみて、何か得た物はあると思います。だいたい高校三年生のこの時期になると、やっぱり自分の将来のことを考える時間は滅多にとれなくて、身近な進学とか就職とかそっちのことばかりに目が行ってしまうのが現状です。でもこの授業は僕たちが他の学校の人たちに比べて、そういう時間をきちんと取れたという点ではすごく良かったと思います。まだまだ色々問題点とかもあったと思いますが、これで三年間のまとめという事で終わりたいと思います。それでは、起立！少し時間オーバーしてすいません、礼！終わります、お疲れさまでした。

＜パネルディスカッションを終えて＞生徒の感想

「皆、思った以上に意見や感想を言って、自分の意見と同じ人、全く違う人、たくさんいて、とても興味深かった。すべての問題に対して思ったことは、皆と同じ高さに立ってものを考えることが必要で、皆がそのようになった時、これらすべての問題を考える糸口を見つけることができると思います。」

「もっと時間がほしかったです。たくさんの問題提起によって、いろいろ考えさせられました。またやりたいですが、これが最後の総合人間科かと思う

ととてもさみしいです。」

「もっと楽しいディスカッションになると思っていたが、たいへん重苦しい問題ばかりだった。……」

「とても緊張した。言いたいことはたくさんあったのに上手にまとめられなくてもどかしかった。改めて『総合』人間科なんだと思った。みんな言っていることに何らかの共通点があって、いい意味でドキドキしておもしろかった。

今まで（三年間）の授業の中で一番楽しかった。もっと早く総合人間科の楽しさが分かればよかったのに。

総合人間科はもっともっと時間をかけて進めていくべき教科だと思うので、将来導入する際には必要最低限のもの以外の教科・科目などは削るようにしましょう。もっと多くの生徒達が総合人間科のよさを見いだせるようにするためにも・・・。」

「今日、改めて、学校教育（基礎的なもの）を受けることは、生きてゆくためにも必要であると思った。今日の7分野でも、すべてがつながっていることを感じた。青山君の動物実験に関することでも、歴史を知り、科学を知り、人間に対することを知らなければならないと思います。つまり、すべてがつながっているのです。　今日のディスカッションにより、社会にあるたくさんの問題を知らされた気がします。また、自分自身の意見がすごくかたよったものであったことを知りました。これからはもっと、人の意見を受け入れ、時にはそれを否定しながら、将来の仕事を探したいと思います。」

「みんなそれぞれの分野で興味があることがちがうし、同じ分野の中でもちがうことがよくわかった。今回、意見を言った人は少なかったけど、その少ない意見は私がこれから生きていくうえで、とても参考になるものだった。

今日のパネルディスカッションはとても勉強になったし、貴重な1時間30分を過ごせたと思う。今日、総合人間科の内容がはじめてわかったような気がする。」

「私はパネリストとして問題提議をしなくてはいけなかったので、たくさんある教育の問題から何をとり上げればいいかずっと迷っていた。

カンボジアのことを話すと、どうしても教育の問題からそれてしまうので、なるべく話さないでおこうと思っていた。教育の問題もカンボジアでのことがきっかけで考えはじめたのは事実だが、私の中にはそれよりももっと大事な問題がカンボジアにはあると思っていた。それに何度もカンボジアの事をみんなの前で話していたので、”またか”と思われるのも嫌だった。カンボジアで今も生活している人々のことを考えると、みんなにカンボジアのことを話す時はプレッシャーの様なものを感じる。話すからにはみんなに真剣に考えてもらいたかったので、正直言うとカンボジアのことは話したくなかった。でも活発なディスカッションの様子を見ていたらカンボジアのことを話す勇気がわいた。時間がなくて残念だったが、途上国の問題、そして今の教育の問題について、もっとディスカッションしたかった。自分の意見が素直に言えて、しかも、それを受け入れてもらえるなんて、他の学校ではあまりできないことだと思う。」

「パネルディスカッションは総合人間科のまとめとしてふさわしいものだったと思う。なぜなら今まで以上にいろいろな人の考えをきけたからだ。それから、パネリストの発言には引き込まれた。特に体験をもとに語った人のはわかりやすかった。私はいろいろなことを経験すればするほど考え方が豊富になるんだなあと感じました。またやる機会があったらうれしいです。」

「パネリストとして発表することが決まった時、入試の前日なのに・・・という思いがありました。しかし、発表の準備のために本を読んだり、改めて福祉について考えることができました。そういった点で、とても役に立ちました。当日、山口さんや原さん、吉原くんの質問、意見にうまく答えることができなくて、満足のいかないところがありましたが、今日の3人の意見を大事にして、これからの福祉の道に進んでいきたいと思います。総合人間科は、私にいろいろなことを与えてくれました。進路について早くから真剣に考えられるようになったのも、総合人間科のおかげです。私たちはこれで終わりですが、これからもずっと続けてほしい教科です。」

V　おわりに

公開授業のパネルディスカッションに参加された他校の先生から次のようなコメントをいただいた。「痛感されるのは、別に教師が一から教えなくても、生徒は学べるのだということです。そもそも、彼らは一教師ではカバーしきれないさまざまな分野に進むのですから、我々が一人一人に有益なことを教えられると思うのが間違いなのでしょう。それならば、彼らが自分でそれを探求する時間を、一見無駄だと思われても、確保することの方が、彼らの将来には有意義な学習ができるということを、この討論は示しています。それも、一人学びを出発点にして同じ時代に生きている若者同士が学び合い、影響し合うことで、高校教員などの及びもつかない高みへと達していく可能性があるようです。」

生徒一人一人が学ぶことを学び、自分で探求し、仲間と影響しあって大きく成長していったことを示すパネルディスカッションが展開できたこととそれを参観された方に認めていただいたことは大きな喜びである。しかし、教師が一から教えなくても有意義な学習ができるかといえば、そうではない。このパネルディスカッションは3年間の総合人間科の成果であり、やはりここに至るまでにはさまざまな段階を経る必要があり、自分で探求する時間の保障をただ与えるだけでは学びの方法は獲得できない。

従来の知識を教え込むといった発想での教師の役割から考えれば、多様な生徒の要求に答えられないかも知れない。しかし、学びのステップを経験させ、自らの問題意識に気づかせるにはやはり教師の存在意義は大きい。パネルディスカッションの発言の中にも、高校1年の個人研究での経験や高校2年の研究旅行、高校3年になってからの学外講師からの影響といった話が出されたが、こうした総合人間科のカリキュラム作成とその指導は教師の力量が問われる場面である。

生徒自らが学びの意義に気づき、自主的にカリキュラム作成に関わってくるまでには、高校1年の個人研究での問題発見と研究方法の習得、高校2年のグループワークでの仲間とのコミュニケーションの難しさの体験やテーマ授業やディベートでの表現力の向上が求められた。

総合人間科の目標である「自分の人生を自覚的に選択する力を育てる」ことは、短期間でできることではなく、少なくとも高校3年間というスパーンでとらえていく必要がある。3年間の学びの成果として、パネルディスカッションを考えると総合人間科の意義があらためて明らかになるのではないだろうか。「あらためて学校教育を受けることは生きていくためにも必要であると思った。最後にすべてがつながって『総合』なんだと思った。歴史を知り、科学を知り、人間を知らなくてはならない。」－この言葉が最後に生徒から発せられたことに大きな意味を感じている。

3．高校３年　カリキュラム作成への生徒参加とスピーチの発展としてのパネルディスカッションの試み

＜資料１＞

高等学校　3年　総合人間科学習指導案

日時　　1997年11月21日(金)10:30~12:00　場所　　小体育館2階

指導　川田基生　長谷川　弘　槙本直子　湯澤秀文　佐藤喜世恵　鈴木克彦　丸山　豊

1　研究主題　　生き方を探る

2　題目 *My Life* ―未来を語る―

3　題目について

総合人間科の目標は「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる」ことであり、その意味では高校３年でどのように進路を決定していくのかは３年間の総合人間科の学習の最終目標となる。１年、２年での個人研究やグループワークなどで培った問題意識や社会認識を基盤にして、進路の選択への取り組みを考える。また個人的な進路だけでなく２１世紀を築く仲間としてこれからの時代、何が求められているのか、お互いに問いかけあい、そして学びあい、社会の中での自己の存在意義を考えていくのがここでの主題である。

4　指導過程

① オリエンテーション ---------- テーマと方法　アンケート
② 進路系統別グループディスカッション -------- グループづくり　学外講師の希望
③ 進路決定に向けてのワークシート作成 -------- 価値観　進路への準備など
④ 学外講師との談話 ---------- 声楽家　弁護士　等15人を招いて
⑤ 夏休みフィールドワークの計画 ---------- 討論とワークシート記入
⑥ スピーチ「未来を語る」 ---------- 全生徒　各ホームルームで
⑦ パネルディスカッション ---------- (本時)
⑧ 小冊子作成

5　本時の授業

(1) 目標　　・自分の夢と未来を語り合う
　　・仲間とともに21世紀の社会の抱える課題を多様な視点から考える

(2) 授業形態　パネルディスカッション

7つのグループの代表がそれぞれの視点で現代社会の抱える、またこれからの時代に考えていかなければならない課題の問題提起する。　そして、いろいろな角度から世界をとらえ、ひとりひとりの現実認識や時代感覚を問う場を形成する。

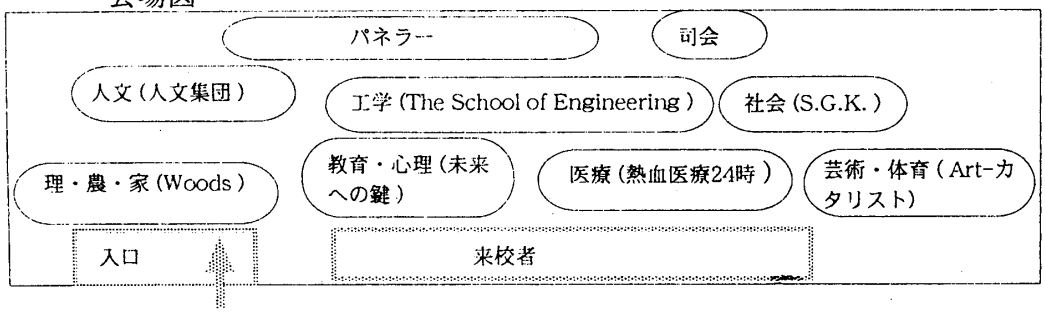
(3)グループ分け

① 人文（人文集団）② 社会（S.G.K.社会を学問的に考えるグループ）③ 工学（The School of Engineering）④ 理・農・家（Woods）⑤ 医療（熱血医療24時）⑥ 教育・心理（未来への鍵）⑦ 芸術・体育（Art-カタリスト）

授業プラン

パネルディスカッションの流れ	役割の内容・留意点
(1) はじめに　① 司会あいさつ　ディスカッションの意義と流れの説明 10:30 ② パネリストの紹介 (2) グループ紹介　どういう集まりか、発表者は何をするのか説明 (3) 発表　問題提起 ① 人文（人文集団）10:35 W君:人間を探る学問であり、過去の研究から未来を考えることができる歴史学にとりくみたい。人と人類の将来の選択の方向性を示唆する学問の意義を訴える。 ② 芸術・体育（Art-カタリスト）10:45 Tさん:日米を比較し、クラシック音楽界の具体的状況、クラシック音楽界の封建的な体制に対する疑問を語る。 ③ 工学（The School of Engineering）10:55 G君:環境に対する問題意識の芽生えからその対策に取り組みたい。これまでの日本のような物質的な豊かさ、モノ作りに奔走する状況への問いかけ。 ④ 理・農・家（Woods）11:05 A君:科学技術によって生じた問題を解決するのも科学技術。行き過ぎた今の状況を元にもどすためにも科学技術の役割は大きい。クローン技術などバイオテクノロジーは何でもできると感動。 ⑤ 社会（S.G.K.社会を学問的に考えるグループ）11:15 Kさん:福祉の意味。ボランティア体験から学んだことと自分の進路。これからの社会で必要な分野であり、みんなの理解が必要。自然な気持ちでボランティアに参加してみては? ⑥ 医療（熱血医療24時）11:25 Nさん:人の命は平等であるはずだが、民族による差別など実際の世界は矛盾を抱えている。医療の地域的格差を無くすために、途上国での最低限の医療保障の仕事がしたい。 ⑦ 教育・心理（未来への鍵）11:35 Aさん:カンボジアの寺子屋の視察から考えた教育問題。日本との比較。本当の学びとは何か。本当の豊かさとは何か。 (4) 質疑応答　発表についての賛成、反対、感想 (5) 議論のまとめ　フロアーから出た意見をふまえて　将来に向けての提言　(2)から(5)を7回くりかえす (6) 全体のまとめ 11:45 ① 感想を聞く　・生徒　・来校者　・教師 ② まとめ (7) 閉会のことば 11:59	パネルディスカッション 数名の異なる立場のパネリスト（発表者）が代表で問題提起をして、それに対してフロアー（聴衆）とディスカッションをして議論を深めて、課題を明らかにするものである。 パネリストは筋道立て、わかりやすく、報告する。限られた時間で行うので、時間を上手く使い、与えられた時間を守ること。他のパネリストの報告もよく聞いて、後で関連したことなどが話せるようにディスカッションの間も準備する。フロアーからの質疑に答えたり、ディスカッションの際には相手の話をよく聞く。 司会 パネルディスカッションの開始から終了までの司会進行をして、発言者を指名する。ディスカッションの進行を司る関係上、発言者の意見をまとめたり、議論の要旨をまとめたりする必要がある。また、ディスカッションの最後にはテーマにもどって、結論を指し示す。 フロアー(聴衆) ただ発表を聞いているだけと思ってはいけない。ディスカッションの際には主役になるのである。客観的な判断力を持って、質疑応答や討論の際には、発表者の現状分析でいいのか、将来への提案はそれで十分なのかを考えて発言する。ただし発言する際はマナーを守ること。興奮してののしったりしてはいけない。常に紳士淑女の礼儀作法で上品に討論すること。ディスカッションを十分に楽む。

会場図



＜資料2＞

＜アンケートから＞

現在の社会、世界が抱えている問題は何だろうか。あなたの考えを述べなさい。

・環境破壊、環境問題、地球をどんどん汚していること。環境汚染から地球を守らなければいけない。人々は、自分一人ぐらいはよいと思って自然破壊を行っている。オゾン層の破壊、動物の保護、森林減少等の環境問題。地球温暖化（地球そのものへの危険)、公害。　……21名
・環境破壊している人、されている地球に対して何も感じない現代人の気持ち
・エネルギー問題。あと何年かで石油はつきてしまうと聞いた。新しいエネルギーを研究・開発しているようだが、今私が使っているエネルギーの代わりはそう簡単には補えないと思う。
・高齢化社会（一部の国々）たくさん問題はあるだろうけどほとんどの人が経験するだろうと推測されるのは「高齢化社会」の問題だと思う。将来みじめな（たとえば金銭的な）生活はしたくないので。　……6名
・人口爆発　人口増加による食料問題　……7名
・政治の力の強さで、国民の意見が押し倒されてしまう。(特に日本)。もっと国民全体で国を作り上げていくべき。
・日本の政府、政治。　政治、国会議員の自己中心的な考え。　……3名
・心の病気
・人類の平和、世界中の国々が平和に暮らすこと地球の平和を維持すること　……6名
・戦争や途上国で犠牲になった人に普通に暮らせる環境を作るべきだと思う。
・人間の問題。金に豊かな人もいれば貧しい人もいる。心が豊かな人もいて、貧しい人もいる。
・冷戦終結における世界的なバランスの不安定化とそれに伴う楽観的思考の拡大。その裏にうえつけられた破滅願望。現在の世界経済や政治に対する反対勢力の台頭と第3国の出現を恐れるアメリカを中心とする軍事大国　なんかのこと。すなわち政治・経済・生活および思想における人類の空洞化、人間性の欠落。
・宗教の違いなどによる紛争や、国と国との利益関係　国と国との争い　……2名
・人種や宗教などの民族問題
・「国際社会」と言いながらほとんど自分の国のことしか考えていないこと。
・武力紛争　テロ・核　……2名
・一見平和に見えるのに実は小さな紛争が驚くほど起こっていること。
・他の国のことをよく知らないから、戦争などの争いが起こると思う。
・共存だろうか。自我のことしか考えられなくなっている。自国のためなら強権を使い、他国をびびりまくらせる。そして、金をふんだくる。「それはいけない！」と思いながらも、それを声を大にして言うことはできない。共存なんて名ばかりだ。
・米軍基地
・南北問題　困っている国もあるし困っていない国もある　……2名
・途上国の抱えるさまざまな問題
・貧富の差。同じ人間でも富める人々と貧しい人々がいること。　経済格差　……6名
・北挑戦の食料難なども国際的に解決しなくてはならない問題。
・日本に住んでいる私達は当然のように幸せに暮らしているけど、世界には食べ物さえもなく、餓死する人々もいる。「かわいそう」という気持ちはあっても「助けよう」という行動にうつせない。とても矛盾があると思う。
・たくさんありすぎてどれか一つに絞れない。いろいろある。
・うそつき・社会の矛盾
・今欠けているのは私も含めて努力と我慢をすることだと思う。かっこ悪いとか言われているけど、それが一番大切なもので忘れてはいけないものだと思う。
・若い人は「考える」ということに弱い気がする。今、危険なのは「たまごっち」や格闘ゲームなどで、やること自体はかまわないが、人の痛みを知らないような人間にならないようにしてほしい。
・多くの人が自分なりの信念、哲学を持てずに、ただ生きたり快楽を得るためだけの世の中を作り上げてしまうこと（そうならざるを得ない状況だから仕方がないが…）
・ほしいものはどんな手を使ってでも手にいれようとする意識。
・同じ動物の中で、人間が無意識の内に優先されていること。環境問題を語る時も、人間が生きられなくなるから危機感を持っているだけ。
・20世紀は戦争の世紀、21世紀は国際犯罪の世紀
・現代はヒトラーとまでは言わないがかなりの自己主張（他者を考えた）ができるリーダーシップの力も持った人間がいないので、あやふやな現代になっている。
・麻薬　　・エイズ　……2名
・行き過ぎた合理主義。特に科学において何ができ

るかに集中しすぎて、何をすべきかということを軽視している。
・ゴミ処理問題
・財政難、赤字国債　……2名
・物価が高い
・経済の悪化、失業者の増加　　・不況　……2名
・本当に必要とされている国、地域に医者・看護婦がいないこと。
・個人の人権が世界中で軽視されている。物質的に豊かになった日本では今こそ考え直してみる時だろう。人権問題　大きなところから言えば人種問題、でも身近なところにポツポツとある人権問題（いじめなど）も、眼を向けられつつあるけれど、もっと皆がそういう問題を考える意識を持つべきだと思う。　……3名
・いろいろたくさんあるが、なるようにしかならない。
・情報化が進んできて、個人のプライバシーに関することが少しではあるが、データとして社会に流れていること。このままでは個人のプライバシーが形だけのものになってしまうと思う。
・不平等なことが多いこと　……2名
・現代社会においてマンションなどが多く立ち並んでいる。その中でよりよい住宅や住宅づくりをするにはどうしたら良いのか。どんな住居が望まれているのか。
・新聞記事を見てみると、現在さまざまな事件や出来事が起きている。これらのことがどうして起きるのか、社会と社会、社会と人間がどのように関わり合っているのか考えたい。
・自分の利益、目先の利益しか考えてない。だから民族紛争が起こったり、HIV問題が起きる。
・心がない
・人の心の中に広がる漠然とした不安感
・よくわからない。ただ、人が人であり続けようとする限り問題はなくならない。人間がすべての過ちを精算しようとしたとき、すべてが無に帰る。残るは膨大な数の人骨と汚された地球。
・何をするにもお金（金もうけ）が最優先になっていると思う。
・学歴社会。頭がいいだけで高い地位につき権力をふりかざして悪いことをしている。それでもたいして罪になっていないこと。何事も学歴、学歴、学歴、特に日本はこのことに染まっている。要は実力だ。アメリカみたいな考えが持てないのか日本は。だからといって学歴が必要でないと言っている訳ではないけど、この世の中実力でのし上がってやるという気持ちがある。　……3名
・一人だけ頑張ろうとしても何も変わることができない社会。どんなに自然が大切だと訴えても、一番偉い人の意見が変わらないと抗議しても無駄になること。
・（特に日本は）マニュアル通りというか、他人と違う意見を持っていると恥ずかしいからか、自分の意見を持っていない人がいる、かな？
・一人の人間の存在を軽く見すぎていると思う。もっともっと大切なものとして認識するべきだ。
・人間のつながり、目的なき人生、無関心、現実逃避、国のつながり
・他人とのかかわり
・虚無的、刹那的思考。無気力、無感動。人間性の喪失。古典や伝統への無知、無理解。
・日本など先進国は医療の進歩からくる高齢化社会を今後どう受けとめていくか。また、人口の増加による雇用問題、先進国と途上国の間に広がる経済格差、平和を目指すに当たって兵器の保有…。（兵器は本当に必要ないのか？また必要なのか）
・人間が人間性を失って、人間ではないものへと変化しつつある。最終形態は決して人間の望んでいるものではない何かだと思う。
・「自分の中の物差しによる差別」－このことは学校内、国内、世界のあらゆる点にあてはまる。
・わからない　……3名

21世紀社会に向けて、あなたは社会の一員として何をなすべきだろうか。あなたの考えを述べなさい。

・“わからないことがある”ということをなくす
・大きなことはできない社会だし、特に大きなことをする気もない。ただせめて他人の迷惑や害にならぬように、そして自分の周りの人を少しでも幸せにできるように。そんな生き方をするのが僕の理想だ。
・戦後の急成長のしわ寄せに私達の世代が直面するであろうことは明白です。進化の果てに絶滅があるように、一時の利が永遠にそれを継続するとは限らず、裏を返せば未来にしっぺ返しが待っています。急成長する時代が生み出した産物＝医療の発達からくる高齢化社会、不況のあおりを受ける雇用問題、沖縄問題等の深刻な状況をどうくぐり抜けていくか考えねばなりません。しかし、これらの問題は私達個人一人でどうなるという問題ではなく、政府という国民の意志の反映された機関でしかどうにもなりません。そしてその政府や、国民社会を支える各機関にも汚職が次々と発覚し

ている現在、次世代の世界を支える人間＝我々の子孫に正しい教育を施してあげることが私達にできる日本の基盤堅めであると考えます。
・自分のできることは進んでやる。
・21世紀は世界中の人が平和で安定した暮らしができるような時代になってほしいと思っている。発展途上国といわれる国がなくなるといい。欲求がいくらでも満たされる裕福な日本に溺れることなく、いつまでも、周りの苦しい生活を送っている国々に眼を向けて生きたい。そして、それらの国を援助するため積極的にボランティア活動などに参加していきたい。
・発展途上の国や問題（紛争など）を世界にアピールすること。
・貧しい国の人々のためになるようなことをする。
・他国の良い文化を取り入れる。
・日本住み続ける気はない。アメリカに住んで（他の国かも）その国のために頑張りたい。
・税制の見直し、政治への積極的な参加
・芸術を通して人間性豊かな心を持った子どもを少しでも多く育てること。
・自分には社会を動かすような力はない。自分の周りにいる人達に気を使うことぐらいしかできないと思う。できることならたくさんの人を助けてあげたいけど、そういう理由にもいかない世の中
・個人の能力には限界がある。社会に対する謙虚さを忘れてはいけない。
・今の状況をもっと知るために視野を広げ一人一人の意見を持つ。
・偉そうにしない。行動し続ける
・とりあえず、自分のことを棚にあげて他者のあらさがしをしないこと。
・できるだけ他人に迷惑をかけずに暮らす。
・まだよく分からないけれど、誰かの支えでいたい。例えば、今の私達みたいに進路について悩んでいる子どもの相談相手ができるような“先生”とか“母親”とか。
・何もしない　　・ない　……2名
・特に何もしない。ただの一市民としていきていく。
・とくにない。「社会」という枠にはまりたくない。
・自分の周りの社会問題を少しずつでも解決していく。
・社会をまだよく知らないので言えない。
・社会の状況をよく知り、それについて意見を言う。
・そのことを考えるためにも大学へ行くのではないのでしょうか。「社会の一員としてこうすべきだ」なんて答えられる人がいるのかどうか疑問に思う。
・夢を贈る、楽しさの追究
・わからない　考えていない　具体的によくわからない　……
・資源の無駄使いは環境破壊につながるので、これを少なくしようと思っています。
・ゴミをなるべく出さないようにする。
・自然保護
・人に優しく、地球に優しく、そして自分に厳しく。
・地球を壊さないで、自由に生きる。
・社会はそんなに変わらないと思う。あえていうなら、ゴミの処理法を考える。
・まずは資源の無駄使いをしないということである。資源というものは限りがあるものだから。
・自分を出しつつ、人とリズムを取って協調していきたい。
・楽しく過ごす。・好きなことをやる。
・社会に働きかける前に、自分なりのやり方で自己を確率する民主主義国家の一員として自律する。それがやがて社会をよくする。
・なすべきことはない。せいぜい食料を大切にすることと、ゴミを出しすぎないように気をつけることぐらい。
・21世紀社会だから何かをしなければいけないとか言うのはうざい。私は私の思うように生きていく。
・社会の一員としては何もなそうとは思えない。個人としての自分がしたいことをすべきだと思う。
・社会にとって必要なことをすべきだと思う。でも、社会が全てってわけでもないと思うから、社会にとっても自分にとっても大事なことを見きわめることが必要なんだと思う。
・国民として最低限なすべきことをする。
・自分のことだけを考えず相手（他人）の気持ちを考えて行動し、誰かの役に立つような行動をする。
・自分は長く生きてあと60年ぐらい。だから将来のことなんて考えず生きていくつもり。あえて言えば、上からの命令どうり働く。　　・働く
・私はみんなのために働きたいと思わないが、一人一人が「これだ！」という道が見つけられたらすごくいいと思う。人それぞれいろんなタイプがいるからそれで結構バランスがとれていいのではないでしょうか。だから21世紀社会にむけて私は自分にとって意義のあることをしたいし、みんなにもそうしてほしいと思う。
・ちゃんとする。仕事をする時はその会社の一員として、もし母親になるとしたらその子の親としてきちんと役割を果たしたい。いい加減な生き方はもうしたくない。その場その場で自分の役割を考えてきちんと生きていきたい。そんな大人になりたい。

・自分が何かのために社会に出るのではなく、人それぞれが自分のために社会に出てそこから社会のためになるものを探し、社会からはみ出しものとならないようにするのがBestであると思う。
・まずは自分が幸せになって、それから周りの人も幸せにする手助けをする。
・社会発達の停滞、後退、もしくは自己の現実逃避。
・社会が何かをしようとしたとき、それを動かすのは一人一人の人間である。その時必要なだけの思考と教養、そして行動力を保有することができれば、社会は自ずから変革している。（注；僕は別に危険思想の持ち主でも予言者でも終末論者でもありません。他に言えそうなことが見当たりませんでした。）
・現代の社会はすごく発達していて素晴しいのだけど、人と人の結びつきがないように思われる。だから、人と人をつなぐ職業であって、人との関係を深められるようでありたい。
・あらゆるもの、動物、人に対して優しい心を持ち続ける。
・社会のために役立ちたい。　人の役に立つことをすべきだと思う。　……2名
・よりよい社会を作りたい。
・いい子を育てる。　子どもの教育を考える。　……2名
・分別ある行動。自分に正しく生きること。
・生まれてくる子が、幸せになれるような社会にすること。老人の暮らしやすい社会にすること。
・高齢化社会に向けて
・人と人とのつながりをおざなりにせずに結びつきを大事にする。
・選挙には必ず行く。　選挙権を放棄しないかな。……3名
・アンケートの主は何を目的としてこの問いを出したのか分からない。何かに反対し署名でもしろと言うのだろうか。そんなことやっても無駄だ。権力を持った人間しか世の中は動かせないのだから。
・意味のある生き方をする。
・病気やけがのために不自由な生活をしている人々を一人でも多くみんなと同じように幸福な生活を送らせてあげたい。
・21世紀社会とはどんな社会ですか？何をなすべきとはそんな義務がありますか？自分が目指す目標に向かって頑張ることがこれから一番大事だと思います。

人生設計と21世紀社会を考えるキーワード

＜人文＞

「高齢化社会」　今でさえ高齢化社会で、なんやかんやともめているのに、私達の親の第1次ベビーブームの人達が65歳以上になったら、今の年金、福祉制度では間に合わないから

「動物（生物）として」　今までは「人間としてどう生きるか」がテーマだったと思う。それは自分らしくとか、理性を持ってとか、貧しい時は生活をより豊かに、等々。でも、これからは地球の上に生まれた一生物として、地球の変化とか環境を考えたいと思う。

「自信」　周囲の雰囲気にのまれないように、自信を持って意見が述べられるようになりたい。

「コミュケーション」　今インターネットなどコンピューターがいろいろな情報をボタン一つで出せたり、日本語変換できたりするけれども、人と人との関わり（聞いたり、見たり、話したり）はとても大切だと思うから。

「情報多様化、コンピューター化」　今でもコンピューターが発展し続けている。これについていくために情報学について学びたい。

「国際コミュニケーション」　外国映画は世界中の多くの社会問題や歴史、科学、宗教など私達にいろいろ伝え問題を投げかけている。そういう映画を自分が翻訳し、みんなに伝えたい。

「国際理解」　他国の良い文化を吸収し、自国の文化の良いところを他国に紹介し、より住みやすい社会を作っていきたい。

「情報化社会と心の問題」　情報化が進むと他人との心の関わりがどんどんなくなってしまうから。疲れた人の心を休ませてあげたい。

「お互いの認識」この世界はこれがないと始まらないと思う。お互い持ちつ持たれつがいいと思う。

「個」　外の世界に眼を向ける以前に自分の内に広がる世界を見つめ、補ってゆかなければ、夢も何も考えられないため。

「洋服」　たくさんのかわいい服をたくさんの人に着てもらう。

「アジア」　アジアを撮りたいから

「精神性」　文明や科学が進歩した割には精神的なものが進歩していないために生まれる歪みが大きいから

「研究と応用」　古い伝統や習慣を軽んじたり馬鹿にしたりする傾向があり、古いこと、特に歴史というものを正面から見る人は少ないように思う。発展の時代が終わり、停滞の時代がくる。あえて過去の歴史を振り返らなければならない時代ではないか。そしてそれを深く追究して、時に教訓として現代社会に応用する。誰もやらないから私がやる。

「平和」

「交流」　できるだけ多くの人や物と交流することによって自分の視野を広げ、多くの刺激を受け、人間として成長したいし、自分の可能性を知りたいから。

「世界」　いろんな人に出会いたい。

「福祉」　盲動犬など育成して、身体の不自由な人などの手助けができるように。

<社会>

「家族」　最近の社会では家族と一緒に過ごす時間が少ないような気がするから。

「法律」　法律の必要性を重視し、それに従事する職業につきたい

「金の流れ」　いかに効率よく金を稼げるか。ドルと円の関係

「老人」　これからは老人が増えていくので、いかにして老人から金を取れるようなことが思いつくか

「高齢化社会」　21世紀には65歳以上の人口が全体人口の25%、つまり1／4を占めると言われている。そして、自分が不自由だった時のことを思い出すと、社会はまだまだ弱者に厳しいと思う。どんな人にでも住みよい社会を作りたい。

「経済(金)」　大金を扱えたらいい。

「平和」　世の中の乱れや、争い事を解決したい。

「助け合い」　人として、どの人でも助け合って生きていかなければならないと思うから。

「日本はいつかダメになる」　学歴社会だから

「趣味」　やっぱりこれからの人生、せっかくの自分の趣味を活かして生きていきたい。夏休みに刑事さんに言われた「警察関係の仕事はどうだ。空手が生かせる」と。そして、警察への興味がわいた。

「きつく、ゆるく、そして　のほほん」　やるときはやって、抜くときは抜く、そしてまわりに流されることなく、自分のスタイルを持ってマイペースでいく。(協調心を持ったなかでの)

「未成年者の犯罪」　未成年者の犯罪（麻薬、殺人、売春など）が多発している。その犯罪を起こしてしまう未成年者を助けたい。だから、今の夢は法務教官になること。できるだけ早く心の着ずをいやしてあげたい。

<エ>

「人権」　物質的に豊かになった反面、人と人とのつながりが希薄になっている。今こそ考え直してみるときだろう。

「地球・大地」　少なくとも人類はあと半世紀は大地から離れた生活を営むことはできないだろう。もし、足が離れても必要な空間であることに変化はない。また、人は絶えず新しいモノを作りたがる。地図に残る仕事、そんな言葉を言ってみたい。

「ラブ＆ピース」　ジョン・レノン

「現金主義」　金があれば何とかなる。

「消費主義社会の崩壊」　人間の活動が環境に及ぼしてきた影響とこれから起こる被害を予知する技術が発達し、環境問題がより現実的なり、無視できなくなるため。

「生き方」　今の人間には自分を持っていないように見える。もっと自分を見つめ直そう。それには苦手なことからチャレンジする。自分の場合はアイデアに乏しいので、建築ならアイデアを必要とされると考えたから。

「差別・偏見」　女だから工業系の職業についたら珍しいという偏見をなくしたい。

「老後　楽しく」　ぜいたくしたいから

「自由」　とにかく他の事に左右されずに自由に生きたい。

「情報化」　いかに情報を管理するか。管理しないと個人のプライバシーに関する情

報まで流されてしまうのではという漠然とした不安がある。

＜理・農・家＞

「そうぞう－想像、創造」　想像力を豊かにしてそれを実現する。

「現代社会」　自分が実際にかかわっている現代の社会において何が必要なのか、生活する中で生まれてくる社会の「なぜ？」という疑問に対し考えていきたい。現代の社会ではやっているもの、私達の身の回りに起きることが、今の社会において、どういう役割を果たし、何を象徴している存在なのか考えていけたらいいと思う。

「遺伝子」　不思議だ。

「情報」　情報は世界を動かす

「緑」　最近「環境に優しい」という言葉をよく耳にするが、実際に行政が今行っているのは、環境保護ではなく大環境破壊であり、どんどん日本の緑は減っている。だから日本を緑豊かな国にできるような職業につきたい。

「（健康）食品」　バイオテクノロジーや食品科学の先端技術を利用している私達が、今後もっとこのようなものに頼っていったらどうなるのか。また、今以上に人間にとって有益な食品は今後できるのかなどを考えていきたい。将来は食品に関わる仕事がしたい。

「個人」　自分のことしか考えられない。みんな。「福祉のことを心から考えたい」なんて思う人なんていないんじゃないかな。金が大量に動くから福祉が注目されている。やっぱりみんな自分のことしか考えていない。

「アジア」　これからはアジアの時代、アジアの人々を助けてまたアジアに学んでいきたい。

「愛」　愛は大切

「国際理解」　将来は教師の免許をとって、協力隊などで発展途上国の人々と暮らし、その理由、と言う点を見つめともに考えたい。

「環境」　自然現象（ヒートアイランド現象やエルニーニョ現象）を通して人類に人間の限界を悟らせたい。

「科学と神様」　物理学者フリーマンダイソンが広島を訪れた時にカープの優勝に遭遇して神が存在するならユーモアのある人だといったから。

＜医療＞

「成長」　自分は（特に）弱い人間だから、心の成長が必要だと思うから

「信頼」　人の命に関わる医療関係に進み、人の命を救える職業（医師など）につきたい。人の信頼を得る医療体制が理想。非加熱製剤使用のHIV感染のようなことがもう起こらないように。

「医療」　医療に何らかの形でたずさわって人と接したい。将来の職業は薬剤師、臨床検査技士。

「思いやり」　人のことを考え、なおかつ自分も大切にする。

「人間」　人はいずれ死ぬ時がきます。けどみんな死にたくないと思う。それをどのようにして紛らわせるか、力になれるかを考える。人手が不足しているので看護婦を希望。

「平等」　人は皆平等であるというけど、まだ全然実行されていないと思う。それは人種的に差別されているからであったり、ある特定の地域に住んでいるためだけであったりすると思うんだけど、そういった普通に、当然の医療を受けることができないでいる人々の役に立ちたい。

「健康・幸福」　看護について学び、人々の健康を支援し人々の幸福のために貢献したい。将来看護婦として患者さんと生活していきたい。

「東洋医学」　できるだけ手術をせず、薬も使わずに治療できるかを知って、それを勧めていきたいから。

「老人」　日本など先進国は医療の進歩からくる高齢化社会を今後どう受けとめていくか。また、人口の増加による雇用問題、先進国と途上国の間に広がる経済格差、平和を目指すに当たって兵器の保有…。戦後の急成長のしわ寄せに私達の世代が直面するであろうことは明白です。進化の果てに絶滅があるように、一時の利が永遠にそれを継続するとは限らず、裏

を返せば未来にしっぺ返しが待っています。急成長する時代が生み出した産物＝医療の発達からくる高齢化社会、不況のあおりを受ける雇用問題、沖縄問題等の深刻な状況をどうくぐり抜けていくか考えねばなりません。しかし、これらの問題は私達個人一人でどうなるという問題ではなく、政府という国民の意志の反映された機関でしかどうにもなりません。そしてその政府や、国民社会を支える各機関にも汚職が次々と発覚している現在、次世代の政治を支える人間＝我々の子孫に正しい教育を施してあげることが私達にできる日本の基盤堅めであると考えます。

「助け合い」　人は助け合いながら生きていくものだから。私も助けられ、人を助けながら生きていけたらいいと思う。

＜教育・心理＞

「真実と優しさ」　冷たい世の中で「生きている」ことは悲しい。

「伝達」　私の思っている事や感じだ事、知っている事など、そういう物を他の人にも伝えたい。ゆとりのある、豊かな感情を持つ人になりたいし、皆がそうなるといいと思う。

「教育のあり方」　親の影響が大きいが、最近自分自身でも考えるようになった。「教育」は恐ろしい。高2で戦前、戦中の教育のあり方を知ってそう思った。…先生になりたい。

「自由」　自分が正しいと思ったらはっきりと意見できるような自由があるといいと思います。

「精神的平和」　「日本は平和だろうか？」と考えた時、物理的には平和だが、精神的な部分ではいじめなどが増えて、とても平和とはいえない気がする。しかもこれは物理的に平和になるにつれて貧しくなっていく気がする。将来はカウンセラーになり、こんな世の中に苦しんでいる人を助けたいと思っている。また、世界中の人の心が平和になるようにNGO職員として働きたいとも考えている。

＜芸術・体育＞

「平安貴族と鎌倉武士」　平安貴族：遊ぶ心を忘れない、楽しさの追求。
広く深い教養を持つ豊かな感性・雅びやかさ
鎌倉武士：いつ斬られてもいいような生き方、いさぎよさ（かっこよさ）というような理想の生き方の実現のため

「living for today」　社会なんていう大きなものは考えられないので、とりあえず自分の将来を考えようと思うと、一日一日を大切に生きていきたい。

「手に職をつけよう」　勉強だけではやっていけなくなる社会になりそう。何か自分の手にあったら、自信にもなるし役立つと思う。

「環境」　うまく書けない

「幸せ」　自分が満足する生き方。他人に迷惑かけずに平凡で平和に生きていたい。で、好きな仕事をやっていきたい。

「個性とアーティストの時代」　親が言っているのを聞いて納得した。

「スポーツ」　スポーツが好きだから